

## 我妻栄の青春（2）

七戸，克彦  
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4705307>

---

出版情報：法政研究. 88 (2), pp.274-162, 2021-10-15. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン：

権利関係：



## 我妻栄の青春（2）

七戸克彦

- I プロローグ
  - 1 日本民法学の時代区分
  - 2 我妻法学の時代区分 …………… 以上 88 卷 1 号
- II 幼年時代（明治 30 年～明治 36 年：0～5 歳）
  - 1 郷土
  - 2 家庭 …………… 以上本号
- III 興譲尋常高等小学校時代（明治 36 年～明治 42 年：6～11 歳）… 以下次号
- IV 米沢中学校時代（明治 42 年～大正 3 年：12～16 歳）
- V 第一高等学校時代（大正 3 年～大正 6 年：17～20 歳）
- VI 東京帝国大学時代（大正 6 年～大正 9 年：20～23 歳）
- VII エピローグ

### II 幼年時代（明治 30 年～明治 36 年：0～5 歳）

【51】 我妻栄の人物評において、常に登場するのは「地道」「堅実」「勤勉」「規則正しい毎日」といったキーワードであり、そして、こうした我妻の学風ないし生活態度は、彼の強い「郷土愛」「敬親」「敬師」の感情と結びつけて語られることが多い。たとえば遠藤浩は、次のようにいう。<sup>(1)</sup>「私は先生のあり方なり、一筋に歩いて

---

(1) 「(座談会) 人間・我妻栄を語る」『特集：我妻法学の足跡』前掲 I 注 (37) 53 頁。

こられた生き方なりを見ますと、きびしい米沢の風土、明治に生きてきた米沢の質実な気風とか、世に出るために学問をしなければという気風が大きな影響を与えているのではないかと思います」。

遠藤浩（1921-2005）の生家は、山形県米沢市の我妻栄の生家のはす向かいの米穀商「金津屋」で、遠藤の父・俊助（我妻より7歳年上）は、男兄弟のいない我妻の兄貴分として非常に親しい間柄であったが――、

父はよくこういったものである。「我妻先生はこうだった……お前もそうしろ……」  
と。たとえば、「我妻先生は、学校から帰ると直ぐ勉強されたものだ。それも毎日――。  
遠足の日でも、どんなに疲れていても、帰られると必ず勉強されたものだ……」<sup>(2)</sup>。

こうした父の口ぐせが与えた影響は計り知れない、と遠藤は述懐するが、一方、師である我妻の人格形成の要因に関していえば、上記遠藤の発言のうち「世に出るために学問をしなければという気風」という部分が気になる。

この点に関しては、我妻の二男・堯も、次のように述べている。「父は所謂、立身出世型の道を歩んできた人で、米沢の田舎の中学校から一高、東大へと進んだ。自分では決して口に出さなかったが、子供にも似た様な道を歩ませたいと考えていたようである」、「前に述べた様に立身出世型の人間であり、田舎から東京に出て苦労したから、東京育ちの所謂秀才タイプ、今でいうエリート人間を本質的に嫌っていた」<sup>(3)</sup>。

同様に、我妻の長男・洋の妻・令子も、義父・栄を次のように評する。<sup>(4)</sup>

栄とは言えば、これはもう根本的には「日本」であった。

外様大名でありながら、官軍に反抗したために何かと逆境におかれた米沢上杉藩の厳しい地理的精神の風土から出て、志を得なかった父〔我妻又次郎〕のため、生活苦と戦って自分を大学に送ってくれた母〔我妻つる〕のために、優秀な成績を取めようと頑張った栄であった。

(2) 遠藤浩『百花繚乱たれ』前掲I注(3)6頁。なお、遠藤拓（遠藤浩の弟）「我妻先生と金津屋」我妻栄記念館だより7号（平成17年）4頁。

(3) 我妻堯「父・我妻栄」『特集：我妻法学の足跡』前掲I注(37)102頁、103頁。一方、我妻の長男・洋によれば、「父にとっては『日本には大学は一つしかなく、学部学科も一つしかない』（私が冗談にこういったところ『本音はそうかも知れんな』といったことがある）」という。我妻洋「不肖の子」『特集：我妻法学の足跡』前掲I注(37)77頁。

(4) 加藤恭子＝我妻令子『メガホンの講義――文化人類学者・我妻洋の闘い』（文芸春秋、昭和62年）54頁。

立身出世型の人間ただだけに、都会育ちの秀才タイプには劣等感を抱くと同時に、嫌っていたようである。

我妻の人格を形成した「米沢上杉藩の厳しい地理的精神的風土」と、「志を得なかった父」「生活苦と戦って自分を大学に送ってくれた母」については、後に改めて触れることとして、まずは「立身出世型の人間」という我妻堯・我妻令子の言辭から検討を開始することにしよう。

〔52〕教育学・社会学・歴史学の分野において、日本の「立身出世主義」はきわめて重要な研究テーマであり、これまでに膨大な業績が蓄積されているが、それらの知見が、法学史の分野において活かされることはほとんどなかった。

戦前の「立身出世主義」は、政府の施策として意図的・作為的に醸成された国民意識であり、それゆえ、ひとり我妻のみならず、彼と同時代人である岸信介や金田一人らもまた「立身出世主義」の人であった。

ここで日本の「立身出世主義」の展開過程について前提確認をしておくと、竹内洋によれば、明治維新の後「立身出世主義」は、以下の3期にわたって変化を遂げた<sup>(6)</sup>とされる。

① 第1期（英雄的僥倖的立身出世主義）——第1期は、明治初年から明治10年代までの20年間で、その担い手は、幼少のため幕末の動乱で活躍する機会を逃し、明治初年の高等教育を受けて洋行した、下級士族の子弟たちであり、法学分野でい

(5) 唐沢富太郎『教科書の歴史——教科書と日本人の形成』（創文社、昭和31年）……〔所収〕『唐沢富太郎著作集7教科書の歴史（下）』（ぎょうせい、平成2年）、小川太郎『立身出世主義の教育』（黎明書房、昭和32年）、門脇厚司（編）『立身出世——學歷社会の心情分析』現代のエスプリ118号（至文堂、昭和52年）、竹内洋①『選抜社会——試験・昇進をめぐる〈加熟〉と〈冷却〉』（リクルート出版、昭和63年）、同②『日本人の出世観』（学文社、昭和56年）、同③『立志・苦学・出世——受験生の社会史』（講談社現代新書、平成3年）……〔文庫化〕『立志・苦学・出世——受験生の社会史』（講談社学術文庫、平成27年）、同④『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』（NHK出版、平成9年）、天野郁夫『試験の社会史——近代日本の試験・教育・社会』（東京大学出版会、昭和58年）、堀和久『立身出世』（文芸春秋、平成元年）、小池滋『英国流立身出世と教育』（岩波書店、平成4年）、E・H・キンモンス／広田照幸＝加藤潤＝吉田文＝伊藤彰浩＝高橋一郎（訳）『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』（玉川大学出版部、平成7年）、岩井洋『記憶術のススメ——近代日本と立身出世』（青弓社、平成9年）、澁谷友美『立身出世と下半身——男子学生の性的身体管理の歴史』（洛北出版、平成25年）、和崎光太郎『明治の〈青春〉——立身・修養・煩悶』（ミネルヴァ書房、平成29年）、伊藤達也『苦学と立身と図書館——パブリックライブラリーと近代日本』（青弓社、令和2年）など。

(6) 竹内洋・前掲注（5）①148頁以下。

ば、鳩山和夫や穂積陳重のような貢進生組や、梅謙次郎のような司法省法学校組、穂積八東のような（旧）東京大学組が、これに属する。

この時代は、いまだ高位に昇るためのキャリアパスが未整備のため、星亨や高橋是清や富井政章のように、波乱の青年時代を経て地位を手に入れた者も多く、刀を学問（洋学）に置き換えただけで、基本は幕末の動乱期と変わらない。そのため、竹内は、この第1期を「英雄的僥倖的立身出世主義」と呼んでいる<sup>(7)</sup>。

② 第2期（秩序的立身出世主義）——第2期は、明治20年から30年までの10年間で、顕職に就くための学歴・資格が制度化された時代である。

このうち、学歴の制度化に関しては、明治19年3～4月に学校の種別と教育体系を整備したいわゆる「学校令」<sup>(8)</sup>が制定される。また、軍属についても、明治20年6月15日勅令第25号「陸軍士官学校官制」、同日勅令第26号「陸軍幼年学校官制」、同年10月8日勅令第53号「陸軍大学学校条例」、明治21年6月14日勅令第44号「海軍兵学校官制」、同年7月14日勅令第55号「海軍大学学校官制」が整えられ、以降、学歴による序列化が国民意識としても浸透する。

一方、武官・文官の採用面においても、この時期より試験制度が導入・整備される。武官の任用についていえば、陸軍では、明治20年12月30日勅令第83号「陸軍准士官下士官採用規則」、海軍でも、明治20年9月26日海軍省令第25号「候補生任用規則」、明治22年7月5日勅令第91号「海軍高等武官任用条例」が制定され、文官の任用に関しては、翌明治20年7月25日勅令第37号「文官試験試補及見習資格」により導入された試験制度が、6年後の明治26年10月31日勅令第183号「文官任用令」により文官高等試験となる。

政府としては、なるべく多くの者の中から有能な人材を選別して、官僚機構と軍隊を充実させ、「富国強兵」を推進したい。そのため、立身出世主義は、任用試験制度の導入およびその受験資格としての学歴の要求と連動して、優秀な武官・文官志願者調達のための装置として機能したのであり、これを、竹内は「秩序的立身出

(7) 竹内洋・前掲注(5)①149頁。

(8) 以下の単行勅令の総称であるため「諸学校令」ともいう。①明治19年3月2日勅令第3号「帝国大学令」（これにより旧東京大学は最高学府である帝国大学に改組された）、②同年4月10日勅令第13号「師範学校令」、③同日勅令第14号「小学校令」、④同日勅令第15号「中学校令」、⑤同日勅令第16号「諸学校規則」。

世主義」と呼んでいる<sup>(9)</sup>。

③ 第3期（修養主義的立身出世主義）——第3期は、我妻の生まれる明治30年代以降の時代である。竹内によれば、「明治30年代から、立身出世主義はもう一度変化する。30年代には士族の子弟や富裕層のみならず、民衆にも立身出世アスピレーション（野心）が浸透した。秩序的立身出世は学歴志向を高めるから、逆に就学率から立身出世アスピレーションのひろがりを見推測することができる。……明治20年代半ばから高等小学校生徒数や中学校生徒数がいちじるしく伸びてゆく。専門学校生徒数は30年代から急増しはじめる<sup>(10)</sup>」。

高等教育機関への進学者が、それまでの士族の子弟から、平民にまで広がった背景には、明治初年の「国民皆兵」と表裏一体の「四民平等」政策がある。というのは、平民に対して士族と等しく兵役を課すのであれば、立身出世の機会についても平等でなければ不満が生ずるからである。一方、徴兵制度と同時期に導入された義務教育（明治5年8月2日太政官布告第214号「学制」）の効果が、庶民層まで浸透した点も大きい。

なお、岸信介は、明治維新の立役者である長州（山口県）の士族の出である<sup>(11)</sup>、我妻栄と金田一他人は、東北（山形県と岩手県）の貧乏な平民の出である（もともと、我妻の父・又次郎は士族の家から入夫婚姻したものである。一方、金田一の父・久米助は平民（農家の長男）で、士族である金田一家に入夫婚姻した後、分家により再び平民となったものである<sup>(12)</sup>）。

(9) 竹内洋・前掲注（5）①151頁。なお、武官については、松下芳男『明治軍制史論（改訂版）』（国書刊行会、昭和53年）、熊谷光久『日本軍の人的制度と問題点の研究』（国書刊行会、平成6年）、遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』（青木書店、平成6年）、加藤陽子『徴兵制と近代日本1868-1945』（吉川弘文館、平成8年）、広田照幸『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』（世織書房、平成9年）、原剛『明治期国土防衛史』（錦正社、平成14年）、野邑理栄子『陸軍幼年学校大勢の研究』（吉川弘文館、平成18年）、大江洋代『明治期陸軍士官の任官・昇進実態に関する基礎的研究——陸士旧期卒業少尉任官者と同時期下士出身少尉任官者（1）（2）』（東京大学日本史学研究室紀要11号（平成19年）245頁、12号（平成20年）73頁）。

(10) 竹内洋・前掲注（5）①177頁。

(11) 麻生誠『エリート形成と教育』（福村出版、昭和53年）201-202頁は、「高等教育学歴所有の流動エリート」（「地方または大都市の中産階級の子弟で、高等教育学歴を獲得し、職業上移動しながら出身地域外でエリートとなった者」）のうち「地方→大都市型（I）」の典型例として、岸信介のキャリアパスを挙げている。

(12) 我妻らが第一高等学校に入学した大正3年改正戸籍法では、族称欄に華族・士族は記載するが、平民は記載する必要がなくなった（18条3号・4号）。明治31年式戸籍で制定された身分登

だが、明治30年代には、軍人に関しては陸軍大学校・海軍大学校の卒業生、学者・官僚・財閥に関しては東京帝国大学（その中でも法科大学）出身者が要職を独占するようになっていたため、これらの学歴を手に入れることができなかった者は、ひたすら日々の職務に専念することで周囲の評価を得て、一段一段地道な昇進を図ることこそが立身出世の姿と考えるようになる。彼らを念頭に、竹内は、明治30年代以降の立身出世主義を「修養主義的立身出世主義」と呼ぶが、しかし、それは、前記②第2期「秩序的立身出世主義」のエリート街道からこぼれ落ちた日陰花どうしの競争にすぎない。

なお、戦後の昭和38年に封切られた大映映画のタイトルにもある「末は博士か大臣か」という言い回しは、すでに戦前から一般化していたようである。<sup>(14)</sup>高松中学の同級生である菊池寛と綾部健太郎の友情を描いたこの映画の脚本を書いたのは、菊池の秘書を務めたこともある舟橋和郎（舟橋聖一の弟）で、一方、撮影の際には綾部自らも助言を与えているから、相当程度真実に基づくものと考えられる。だが、綾部健太郎が、戦後、池田勇人内閣の運輸大臣に昇ったのに対して、菊池寛は文学博士になっていない。一高を中退し、京大卒業後も作家として芽の出ない菊池の苦悩する姿は「修養主義的立身出世主義」である。<sup>(15)</sup>だが、「末は博士か大臣か」の王

---

録簿は大正4年式戸籍で廃止された。また、大正9年10月1日の国勢調査開始以降は、族籍別人口統計が作成されなくなる。「官報」の大学入学者・卒業者の記事においては、我妻の入学（大正6年）後の大正7年以降、「士族」「平民」の記載がされなくなる。

(13) 竹内洋・前掲注（5）①149頁。

(14) なお、「末は博士か大臣か」という言葉の起源について、国立国会図書館「レファレンス協同データベース」は、「記述のある資料は見あたらず。判明しなかった」と回答している（[http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref\\_view&id=1000014751](http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000014751)）。ただ、たとえば『福岡高等学校学術史』（福岡高等学校学術史、昭和24年）「第1篇 学術史」の昭和2年度の項には、「……〔昭和初期の〕現実社会は決して安閑とした高校生活のいはば『末は博士か大臣か』の未来の国家の重鎮を夢見て往昔の高校生の英雄崇拜稚氣満々たる粗暴な浪漫主義耽美的人生観等々ゝる感激を許しはしなかった」とあり（22-23頁）、「末は博士か大臣か」の語は、遅くとも終戦直後には一般的な言い回しであったことが知られる。

(15) なお、我妻より10歳ほど年下の戒南通孝（1908-1975）や川島武宜（1909-1992）は、立身出世主義に対して批判的なエッセイを残しているが（川島武宜「立身出世」展望69号（昭和26年9月号）6頁、戒南通孝「立身出世の復活」新潮50巻8号（昭和28年8月号）18頁）、彼らが嫌悪しているのは、「修養主義的立身出世主義」の弊害（立身出世が上司の評価によって定まることから、上司に媚びへつらう卑屈な態度に陥りやすいこと）であって、選抜試験のような「客観的」基準で定まる「秩序的立身出世主義」ではない。彼らもまた「秩序的立身出世主義」の成功者である学歴エリートの目線に立って非エリートたちを論評しているように見える。

道は、終始一貫して「秩序的立身出世主義」であり、それゆえ、この言葉は、菊池・綾部の高校時代（明治43年～大正2年）・大学時代（大正2～5年）と入れ替わりに、高校生活（大正3～6年）・大学生生活（大正6～9年）を送った、我妻や岸らにこそふさわしい。<sup>(16)</sup>

(16) もっとも、我妻が法学博士号を取得したのは、東大を定年退官（昭和32年3月末日退官）してから4年後の、昭和36年12月15日、我妻64歳のことであった。

成富信夫「我妻君の人となり」〔特集：我妻法学の足跡〕前掲I注(37)135-136頁……〔所収・改題〕成富信夫「大切な男を失って」『追想の我妻栄』前掲I注(63)35-36頁は、我妻の博士号取得が遅れたのは、彼が留学からの帰国（大正14年12月）直後に成富に対し「自分の博士論文の提出はお前の論文が出来上がるまで待ってやろう」と述べた、その約束を守ったためと語る（成富が「権利の自壊による失効の原則」で法学博士号を取得するのは、我妻が大学を退官する昭和32年3月22日のことである）。

しかし、我妻自身の言によれば、定年退官後の博士号取得は、昭和2年6月より「法学志林」での14回に及ぶ連載の末に途絶した「近代法における債権の優越的地位」を発展させ、「資本主義の発達に伴う私法の変遷」のテーマで論文完成を目指したが、ついに果たせず頓挫したことと関係する。我妻栄＝利谷信義「法律学と私——我妻栄先生に聞く・第3回」法学セミナー71号（昭和37年）86頁……〔所収〕利谷信義＝乾昭三＝木村静子（編）『（我妻栄・末川博・滝川幸辰）法律学と私』（日本評論社、昭和42年）66頁「ご承知のように、私は博士号をとっていない。父〔我妻又次郎〕の生前にそれをとらせたい、とかの女〔妻・我妻緑〕は思っていたようにでした。それに対して、私は、いったんですよ。あの論文〔「債権の優越的地位」〕を完成して博士になる。大学教授はどうせ博士の値打はあるんだ。それがわざわざ博士号をとるのは、後世に残すような仕事をした記念とする機会であればよいんだ、とね。ところが、論文はついに完成しないうちに、父は亡くなりました〔昭和18年6月13日没。このとき栄46歳〕。父は私が博士にならなかったことをかくべつ心残りとも思っていなかったようです。かの女〔妻・緑〕はどう考えているのかわかりません。／これらご承知でしょうが、この〔昭和37年〕3月末で旧制の博士論文提出が締め切りになりましたね。あの時に、ちょっとした動機から、あなたもあの時にでき上った法律学全集の親族法〔有斐閣、昭和36年4月刊〕を、3月31日ギリギリのところで提出したんですよ。このあいだ教授会をパスしたそうです。妻には論文を提出したことを話していません。免状がきたら黙ってみせてやろうと思っています。その時の妻の反応はどうか、楽しみにしています。おそらく無条件には喜ばないでしょう。ことに君〔利谷信義〕と対談をした後ですからね。論文を完成もしないで博士になるなんて、論文の完成をいよいよあきらめてしまったのか、と残念がるかもしれませんね」。

これに対して、我妻の親友・中川善之助は、最後まで博士号を取らなかった。「（座談会）中川先生の人間を語る」『中川善之助・人と学問』法学セミナー臨時増刊253号（日本評論社、昭和51年）54頁「**勝本**〔正見〕……後に彼は博士にもならなかった。そういう、ピューリタンとでもいおうか、われわれのような甘い考えではなくて、彼は学問に対して敬虔の念をもっておりました」、55頁「**勝本**……。我妻君が学位を取ったとき、ほくも昔の友人にすすめたことがある。京都で滝川〔幸辰〕君に学位を取れと言った。そんなこと言うとおこるかと思ったら、滝川君はすぐ論文を出すから、おまえ審査しろという。よし審査してやろうというので、滝川君はあっさり書き上げたのです。ほくは中川君にもすすめたのですが、中川君は学問については非常に神聖観というがあるので、その問題はいずれ解決するからというだけです。……。自分に対しては、学問へのピューリタンの態度を堅持していました。そこはえらいと思います」。76頁「**勝本**……中川君は、ピューリタンの精神や、学位の問題を初めとして、コッソと

以下、我妻たち学歴エリートを支配した「秩序的立身出世主義」に留意しつつ、まずは我妻の生まれ故郷（→1）と家庭（→2）について見てゆくことにしよう。

## 1 郷土

【53】「憲法問題研究会」における我妻の盟友・大内兵衛は、日米安全保障条約の国会自然承認<sup>(17)</sup>2日前である昭和35年6月17日の神戸新聞に、我妻の故郷・米沢を題材とする次のような随筆を寄せている。<sup>(18)</sup>

今日、米沢の名所といえ、上杉鷹山公の廟所、上杉神社であるのはいかにも米沢らしい。彼の遺訓にいわく、「(一) 人民は国家に残したる人民にして我私すべきものにはなく候 (二) 国家人民のために立たる君にして君のために立たる国家人民に無之候」と。まさに西欧の開明的絶対君主のイデオロギーである。つつしんでわが岸信介君にこのコトバを呈す。

……〔中略〕……。

米沢は明治、大正を通じ二人の代表的人物を産した。一人は池田成彬<sup>(19)</sup>、一人は伊東忠太、結城豊太郎は山形に近い<sup>(20)</sup>。池田は当代の鷹山という面があった。忠太のおどけた諷

するところを一つ持っているんだ。それが何であるか非常に難しいけれども、一つそういうコトツとしたものをあの人は持っている。……学位を幾らぼくたちが勧めても、学位論文を出さなかったとか。たとえば、ぼくたちなんかは、「身分法学の総則的課題」あれでもいいじゃないか。あれ出して学位取らないと、後の者が困るからと言ったんですけども、「いやいや、そうしてくれるのはありがたいけれども、おれにはおれの考えがある。彼は別にそれを気取って言っているんでも何でもありませんよ」。

(17) 昭和35年1月16日に渡米し19日新安保条約に調印した岸信介首相は、アイゼンハワー大統領訪日が予定されていた同年6月19日までの条約批准をもくろみ、衆議院の優越を利用した自然承認（憲法62条）が成立するデッドラインの5月20日衆議院本会議での条約承認にこぎつけた。アイゼンハワー大統領の訪日は結局中止されたが、条約は参議院の承認抜きで6月19日自然承認となる。

(18) 大内兵衛「みちのくの初夏」「米沢」……〔所収〕『日本の曲り角』（文芸春秋新社、昭和36年）278頁。

(19) 〔七戸注〕いけだ・しげあき（1867-1950）。慶応3・7・16（1867・8・15）生、最後の米沢藩主・上杉茂憲の小姓・池田成章の長男、米沢中学から大学予備門受験のため慶応義塾別科に入学するが、明治23年慶応義塾に新設された大学部理財科に進み、その後渡米、帰国後は時事新報社から三井銀行に入学し、昭和7年三井合名理事、昭和12年2月日本銀行第14代総裁となる。昭和25・10・9没。

(20) 〔七戸注〕ゆうき・とよたろう（1877-1951）。明治10・5・24生、山形県置賜郡赤湯村（現・南陽市赤湯）で造り酒屋を営む結城彌右衛門の長男、山形中学、二高から、明治36年東京帝国大学法科大学政治学科卒業、翌37年日本銀行入行（高橋是清副総裁のとりなしによるという）、

刺画は米沢の名物梓山に伝わる獅子踊りのユーモアをもっていた。現代米沢を代表する人物は、私の知っているはんいでは、我妻栄と大熊信行の両君である。法律学者、経済学者として、ともにもう米沢的ではない。日本的、あるいは世界的である。それなのに彼らはふるさとの色、ふるさとの人、ふるさとのリンゴの花をなつかしんでいる。

米沢の生んだ建築界の巨人・伊東忠太については、説明するまでもあるまい（→後掲【67】図表Ⅳ㉔）。我妻の文化勲章の受章（昭和39年）と、これを受けての米沢市名誉市民の称号授与（同年）は、米沢にあっては、伊東忠太（昭和18年文化勲章、昭和29年「米沢市名誉市民条例」条例制定第1号の名誉市民）に続くナンバー2である。

一方、我妻と同時代人の大熊信行（我妻の4歳年上、1893-1977）は、米沢中学時代に浜田広介（1893-1973）や上泉秀信（1897-1951）と同人誌を作っていたので、我妻の中学時代について触れる際に、3人あわせて言及することにしよう。

### （1）「東北」出身

【54】我妻の周囲の人間の記述の中には、彼の人柄や学風を、「米沢」出身者というより、「東北」出身者という大括りの中で、ステレオタイプの論じたものも散見される。「天才ではなく努力型の秀才」「地道にコツコツ積み重ねてゆく学風」といった評価に、「東北人らしい」という形容詞を冠する記述である。

史学・民俗学・文化人類学の研究成果によれば、東北人に対する「純朴、木訥、寡黙、忍耐強い」といった評価は、東北地方に対する「寒い、暗い、貧しい、文化的水準が低い」といったマイナスイメージと表裏一体のものであり、そして、このような東北地方・東北人に対する固定観念は、すでに江戸期より存在していたところ、それが戊辰戦争によって増幅されたものだという<sup>(21)</sup>。形成要因は、以下の3つ

大正8年理事に就任するが、大正10年安田善次郎の不慮の死を契機に安田財閥に転じた後、昭和5年日本興業銀行第6代総裁、昭和12年林銑十郎内閣の大蔵大臣兼拓務大臣から、同年7月日本銀行第15代総裁となる。昭和26・8・1没。

(21) 詳細は、東北史学会（編）『東北の歴史叢書（第1編）～（第6編）』（東北出版、昭和26年～昭和29年）、豊田武（編）『東北の歴史（上）（中）（下）』（吉川弘文館、昭和42年・昭和43年・昭和54年）、高橋富雄『（風土と歴史2）東北の風土と歴史』（山川出版社、昭和51年）、真壁仁＝野添憲治（編）『民衆史としての東北』（NHKブックス、昭和51年）、色川大吉『色川大吉著作集4 地域と歴史』（筑摩書房、平成8年）「Ⅱ 東北日本の近代史」77頁、菊池勇夫「東北人とエミシ・エゾ」東北学〔第1期〕1号（平成11年）200頁、河西英通『東北——つくられた異境』（中公新書、平成13年）、赤坂憲雄『東北学——忘れられた東北』（講談社学術文庫、平成21年）、岡本公樹『東北——不屈の歴史をひもとく』（講談社、平成24年）、色川大吉『東北の再

である。

① 気候的（地政学的）要因——「貧しい」「文化的水準が低い」という評価は、およそすべての地方一般に対して下されるものであるが、「寒い」「暗い」というイメージは、西日本では、せいぜい山陰についてしか成り立たない。<sup>(22)</sup>

② 歴史的（文化史的）要因——奥羽地方については、大和朝廷による蝦夷（エゾ・エミシ）征討の歴史から、中央の統治の及ばない未開・野蛮の異境という固定観念が存在していた。もっとも、この点は、九州南部の熊襲（クマソ）についても当てはまったが、しかし、維新の立役者となった薩摩に対して、戊辰戦争で奥羽越列藩同盟を結んで再び「朝敵」となった東北は、「官軍」である薩長土肥から（彼らも地方出身者である点では同類であるにもかかわらず）「白河以北一山百文」と侮蔑されることとなった。

③ 言語学的（方言学的）要因——東北弁（東北方言）は、関東弁（関東方言）や東海東山方言（中部方言）などととも、東日本方言（東部方言）に属する。東関東方言のうち茨城弁や栃木弁を東北方言に含める見解もあるが、これら東日本方言の中でも、東北弁だけが特別扱いされるのは、上記①気候的要因と、②歴史的要因のせいである。これに対して、九州方言（九州弁）にあっても、とりわけ鹿児島弁（薩隅方言）は、東北弁以上に聞き取りが難しいが、しかし、南九州は、①地政学的に「寒くも」「暗くも」なく、②歴史的にも明治維新における勝者である点が異なる。

——以下では、③方言の話に限定しよう。

発見——民衆史から読み直す』（河出書房新社、平成24年）、菊池勇夫『東北から考える近世史——環境・災害・食料、そして東北史像』（清文堂出版、平成24年）、赤坂憲雄『東北学——もうひとつの東北』（講談社学術文庫、平成26年）などを参照。

(22) 一方、遠藤浩「米沢の風土から」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）194頁……〔所収〕遠藤浩「百花繚乱たれ」前掲Ⅰ注（3）107頁は、次のように述べる。米沢は「冬になると、日本でも有数の豪雪地帯として、屋根近くまで雪が積る。朝学校に出かけるときは、積った雪をかきわけて行かねばならない。小学校1年の時でもそうしなければならない。吹雪の日などは眼もあけられない。耳が切れるように冷い。冷いというより痛いといった方が当たっているかもしれない。／それも3月・4月になると、黒い大地が顔を出し、やがて青々とした緑が周囲をつつむ。／私は、先生のもっておられた、溫和さ、きびしさ、辛抱強さ、明るさ、そうした性格が、こういう米沢の風土と何か関係があるような気がしてならない」。なお、今田久夫〔我妻栄記念館館長〕「米沢の風土」我妻栄記念館だより5号（平成15年）2頁も参照。

## ア 我妻栄と東北弁

【55】 我妻は、高校で金田一他人（岩手県出身）と「同じ東北人であることなどが理由となつて、親しい間柄となつた」といい、大学で民事訴訟法を教つた仁井田益太郎（福島県出身）に関して「東北なまりの先生の発音は、私にはなつかしかつた」と述べている。

他の東北出身者と同様、我妻もまた、方言コンプレックスに悩んだ<sup>(25)</sup>。還暦を過ぎ東大を退職した後のエッセイ（昭和33年）で、彼は次のように述べている。「自分が話したことの録音を聞くのはあまり愉快でない。自分では、もっとうまく話をしてゐるつもりだが、東北弁が耳ざわりだ。自信を傷つけられることおびたしい」「それにこりた私は、近頃では、最初に頼まれたときに、速記・録音一切しないという条件を出すことにしている<sup>(26)</sup>」。

東北方言の中でも、米沢弁の特徴は、「語調は、ひどく旋律性に乏しく、鼻に抜けず、歯もぴたり閉じたままなので重苦しく、粗野で、極度の鼻声になる<sup>(27)</sup>」。松野良寅は「初めて米沢を訪れた東京出身の某氏が、米沢に着いた途端、『落ちる人が死んでから落ちて下さい』という駅員の発声にギョツとした、米沢っておそろしい所だね、と語るのを聞いた<sup>(28)</sup>」という。

(23) 我妻栄「令弟他人君を通じて」前掲Ⅰ注（4）19頁。

(24) 我妻栄「民訴の思い出」中田淳一＝三ヶ月章（編集）『民事訴訟法演習Ⅱ』（有斐閣、昭和39年）295頁……〔所収〕『民法と五十年——身辺雑記（4）』前掲Ⅰ注（115）241頁。

(25) 戦前に我妻の東大での講義を受講した小熊又三は、「山形出身の先生独特のアクセントにも非常な親しさが感ぜられた」とする。小熊又三「我妻栄先生の受賞に寄せて」朝日新聞昭和39年11月10日朝刊「声」欄……〔再録〕小熊又三「投書を機縁に」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）384頁。なお、小嶋聡子「宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響」国立国語研究所論集5号（平成25年）27頁も参照。

(26) 我妻栄「（身辺雑記）録音」ジュリスト155号（昭和33年）40頁……〔所収〕『身辺随想——身辺雑記（2）』（有斐閣、昭和38年）30頁、35頁。なお、江辺美和子「父のような先生」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）282頁も参照。

(27) チャールズ・ヘンリー・ダラス／松野良寅（訳）「米沢方言」『幕末から明治初期にかけての教育事情（米沢市史資料8号）』（米沢市史編さん委員会、昭和57年）75頁（なお、C・H・ダラス『米沢方言』（出羽方言研究会・出羽方言研究叢書・第5集、昭和28年）も同一文献の翻訳と思われるが未見）。このほか、米沢方言の詳細に関しては、内田慶三（編）『米沢音考』（目黒書店、明治35年）、斉藤義七郎『米沢弁』（国立国語研究所・地方調査員報告、昭和25年）、米沢女子短期大学国語研究部（編）『米沢方言辞典』（桜楓社、昭和44年）、上村良作『米沢方言辞典』（桜楓社、昭和52年）参照。

(28) 松野良寅「ふるさと・明治の曙——C・H・ダラスの論文を読む」（我妻栄記念館、平成12年）20頁。標準語に直せば「降りる人が済んでから降りて下さい」である。

## イ 中川善之助と東北弁

【56】 我妻と同年で1学年下の中川善之助は（我妻は明治30年4月1日の早生まれ、中川は同年11月18日の遅生まれ）、上記我妻と同時期のエッセイ（昭和32年）で、「東北語は、標準語から見ると、たしかにおかしい。敬語がなく失礼な、従って野卑な言葉のように思われる<sup>(29)</sup>」と述べる。彼の言を続けよう。

こうした方言的語感はなかなか他地方の者にはわからない。判らないといつては笑い、敬語がないといつては卑しめる。しかし判らないのは相互的であるし、敬語がなくぞんざいだという非難は、標準語的語感からいってそうだというだけのことである。

ところが、中央語はどうしても地方語を軽蔑する。中央語と標準語とを同じものにしてしまって自分だけが正しいもののように自惚れる。ずっと以前は、江戸っ子の言葉が標準語を圧していた。『山ノ手言葉なんて、おかしくて使えるか』と江戸っ子はたんかを切って、あのシトだとかマッチロな雪だとか、無理してでも頑張っていた。だが江戸っ子にいわせれば田舎漢の殖民地のような山ノ手の言葉が今日では標準語に近くなり、標準語さえ話せばどこへ行っても大威張りというようになってしまった。……〔略〕……。

この中央語に対して江戸っ子は江戸弁を使うことに引け目を感じてはいない。大威張りでマッチロなシトを振廻わしている。大阪人も京都人も比較的自分の喋る地方語を何とも思っていないが、一般的にいうと、地方の人はその地方の方言を話すことに一種の文化的劣等感をもっているらしい。なるべく標準語で話そうとするのは、そうしなければ相手が理解できないだろうという思いやりより、自分を地方語から解放して標準語人種に見られようとする欲望の方が強いのではなからうか。その標準語がうまく喋れないと、仕方がないから黙ってしまう。歳若くして東京へ女中に出て来たような娘さんの中には、初めから田舎の言葉まる出しで喋りまくる子もあるけれども、多くは非常な無口になってしまう。地方語を喋って軽蔑されまいとするためである。

【57】 このような中川の言辞は、彼が幼少から全国各地を転々と移り住んだためと

(29) 中川善之助「(民法断想34) 方言」法律時報29巻12号(昭和32年)50頁……〔所収〕中川善之助『赤いベレー——法学つれづれ草』(日本評論新社、昭和33年)194頁。

思われる。彼は、次のようにも<sup>(30)</sup>いう。

私は神田で生れて麴町で育った。幼稚園と尋常２年までを麴町小学校に通った。その頃の先生方については少しも記憶がない。

父の勤務上の関係から私は小さいときにあっちこっちと連れ廻られたので、どうも私には郷土精神といったやうなものが薄い。善くいへばコスモポリタン、悪くいへばハイマートローゼだ。東京で生れて名古屋、金沢、また東京と移り変わったので、本当の東京弁も出なければ、名古屋弁も金沢弁も純粋ではない。母方の信州言葉も交って一種異様の普通語的言辞を使ふのだが、何か一つ郷土の方言をもってゐる人などを見ると何となく羨やましい感じさへする。

そんな訳で学校も私は小学校を４回、中学を２回転校した。

東北大学で中川門下の山畠正男は、我妻と中川を次のよう<sup>(31)</sup>に対比している。

「地味にこつこと」が我妻先生の生活態度であつたとすれば、中川先生のそれは都会的であり派手であつた。……。「我妻のようにやっていたら、いつまでもやれるんだが……」とは先生が私に洩らされた言葉である。先生は学究というには余りに多才であつた。文才は数多くの随筆となり、スポーツは万能（とりわけテニスと山スキーが有名）、音楽は和洋を不問である。

一方、そのような中川に対して、我妻は次のような感情を抱いていた——と長男・洋は<sup>(32)</sup>いう。

「中川（善之助）君は、俺にとって一番の親友といつていいが、俺の中には中川に対する一種の憧れのようなものがある」と父はいつた。中川先生が芸術を論じ、軽妙な随筆をモノされるところが父には羨ましく、「俺もああいうセンスを身につけたい」という願いが、中川先生への尊敬や友情の基礎にあるというのであつた。

(30) 中川善之助「学恩」『木霊』（国立書院、昭和22年）68-69頁。中川の族籍は、石川県・平民であるが、父は加賀藩の武士の家の出で、長野県の巡査を辞めて東京で会社勤めを始めた神田美土代町の家で、善之助が生まれた。彼が幼稚園に入る前に一家は麴町四丁目に移り、その後、父の転勤により、小学２年半ば（7歳）から名古屋の小学校に通い（八重学校→高岳学校→白川学校）、中学も愛知一中から２年次に金沢一中に転校、四高を経て、東大に入学した。

(31) 山畠正男「郷土と法学者・石川県」全国どこでも郷土——中川善之助先生」法学教室149号（平成5年）140頁。

(32) 我妻洋「不肖の子・続編」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）408頁……〔所収・改題〕「不肖の子」松野良寅（編著）『我妻栄——人と時代』（我妻栄先生誕生百年記念実行委員会、平成9年）240頁。

中川と同じく、都会的で派手で多芸多才の学者として思い浮かぶのは、田中耕太郎（我妻や中川の7歳年上）であるが、彼もまた、中川と同様、父の転勤に伴い全国各地を転々としながら育った。田中と中川の類似性に関しては、星野英一も「中川先生の家族法学の歴史における位置は、商法学における田中耕太郎先生とパラレルの面があると感じています」といい、加藤一郎も「たしかに、中川先生には、唄〔孝一〕さんがおっしゃったように、いわば非常に形式社会学的な面が強いですし、田中耕太郎先生の影響があって、『色彩』という言葉や『調子』という言葉などを、田中先生から引用して使われています。しかも同じように一般的な立言として使われています」という<sup>(33)</sup>。

【58】我妻のような「土着」型の育ち方をした人間と、中川や田中のような「転校生」型の育ち方をした人間で、「人と学問」に差異が生ずるのも興味深い事象であるが、再び先の方言に関するエッセイ（【56】）に話を戻せば、中川の文章は、次のような話題で締め括られる<sup>(34)</sup>。

こんなことで妙に東北語に興味をもっていたおりから、ガスの工事に来た工夫が、「スパナコありえんか（ないかの意）」といったとって妻が私に笑って話をした。一体に東北では何でも名前した後へコを付けて、靴コだとか、油コだとかいうので、仔牛のことはベコッコのコッコというんだとってよく人が笑う。それにしてもスパナにまでコをつけるのは珍しいなどと話していたら、山形だか秋田だかから来ている学生が傍にいて、コをつけるのは丁寧な言い方なのだと教えてくれた。私も永年東北に住み、名詞の後にコを付けることはよく知っていたが、そのコにそんな語感が付着しているという話は初めて聞いてひどく興味を覚えた。……。私も地方の成人講座にでも招かれたら、「15歳にならねえ子コを養子コするときゃア、その子コの親ンツァマと話コすればええ」とでもいわないと、話がぞんざいに聞こえるかも知れないと思って一寸苦笑した。

(33) 「(座談会) 中川〔善之助〕先生の学問をめぐって」『中川善之助・人と学問』前掲注 (16) 84頁〔星野〕、103頁〔加藤〕。さらに、104頁〔星野〕「……広いものをこの概念〔「統体法」概念〕の中におち込んでしまっって説明しようとしたところに、もともと無理があったような感じがします。ついでにこの点でも、私は、田中耕太郎先生との類似を非常に感じます。田中先生も『保険の団体性』といった、かなり問題となることをいわれたわけで、そういったところも中川先生と田中先生とが共通した面だという感じを持ちます。

(34) 中川・前掲注 (29)〔所収〕198-199頁。

おそらく書いた本人は意識していないのだろうが、この話の結びは、洗練された都会人が東北弁を嘲笑しているかのような印象を受ける。「全国どこでも郷土」であったとする山島正男の中川評と異なり、「根無し草」の転校生である中川は、最高裁判所判事や京都大学教授への誘いを蹴ってまで40年間を過ごした東北・仙台の地においてすら「異邦人」であったように覚える。

### ウ 吉田熊次と東北弁

【59】名詞の後に「コ」をつける用法は、ドイツ語の〈-chen〉の名詞後綴りのニュアンスと同様のもので、東北人以外にもよく知られているが、東北方言が通じなかったために、予期せぬ軋轢が生ずる場合もある。「米沢海軍」の代表的人物である上泉徳弥（海軍中将。後掲【67】図表Ⅳ②）は、米沢中学から海軍兵学校への進学準備のため攻玉社に入学した際、校長・近藤真琴に向かって「お前が校長先生か」と口にして、校長を激怒させた。だが、米沢では「〈お前〉は敬意を表すもので、目上の人に対してだけ用いられる。／〈お前様〉は最上の敬意の表現で、以前は藩主に対する敬称として用いられた。／〈あなた〉は全然使われていない<sup>(35)</sup>」。

一方、東置賜郡の農家から東京帝大文学部教授に昇った戦前の教育界の重鎮・吉田熊次（1874-1964）に関して、弟子の海後宗臣は次のように回想している<sup>(36)</sup>。

「熊ちゃん」という愛称は吉田博士にとっては決して楽しい呼び名ではなかったらしい。何時であったか文学部の懇親会が小石川植物園で開かれた時、吉田博士がスピーチのため立ちあがると、どこからか「熊ちゃんしっかり」という掛け声がかかった。そのとき吉田博士は可成り御機げんの悪い顔をした。どうして「熊次」というような名がつけられたのか。それは吉田博士の生れた郷里が山形県の置賜であって、近くには羽黒、月山、湯殿の三山があり、そこには昔から山伏修験者がたくさんいた。出身は農家であったから、昔からこうした修験者が山を越え谷を渡って、多くの農家を訪ねるのが普通であった。幼時は殊のほか病弱であったので、或る修験者にどう

(35) チャールズ・ヘンリー・ダラス／松野良寅（訳）「米沢方言」『幕末から明治初期にかけての教育事情（米沢市史資料8号）』（米沢市史編さん委員会、昭和57年）75頁。なお、「〈貴様〉は、東京では非常に侮蔑的な表現であるが、（米沢では）同等の人達の間で鄭重かつ親愛のことばとして使用され、〈きさまがた〉という複数形もある。それはまた、目下の者に対しても共通に用いられ、その場合は、愛情や好意の表現となる」。

(36) 海後宗臣「ヒコ学者のみた三教授」鈴木信太郎（編）『東大教授らくがき帖』（鱒書房、昭和30年）102-103頁。

したならばこの子供が丈夫に育つだろうかと父親が相談した。するとこの修験者は子供の名を改めて強い動物の名をつけるとういというので、熊次と命名した。それから急に体が頑丈になって、熊の如くになり、今日80歳以上にも達したというわけである。虎とか彪とかとか象とか狼とかいう名のついた人にはこうした来歴話があるのかも知らない。……。

吉田博士は山形県の田舎の出身であるために何処となく東北の体臭があふれていた。私が最初の講義時間のときに、東北口調を耳にして、イとエとの区別がなく、弁が重いので東北生れの先生であることがすぐにわかった。私は茨城に生れたのでエバラキ語と山形語とはどこかに共通なところがあって、郷里の親類農家のおじさんの話をきく感じで講義を聞いていた。その他にも吉田博士には山形の農家出身者の体臭を発散させているものがあった。

【60】 吉田熊次が「郷里の親類農家のおじさん」であったのと同様、法務省の特別顧問時代（東大退職半年前の昭和31年7月から死去まで）の我妻栄も、法務省内で「田舎の村長さん」と呼ばれていた。<sup>(37)</sup>

しかし、青年時代（大正末期の助教授・留学時代）の我妻は、大変垢抜けて都会的であり、二男・堯も、「そのころの父は晩年の父よりもはるかにハイカラでございます。ヨーロッパでよほど西洋文明に憧れてその通りにしたのだらうと思います。オールバックにいたしまして、メガネも晩年にこちら〔米沢〕に伺ったころはまた野暮ったいメガネをかけておりますけれども、その当時は細縁のメガネをかけております」と述べている。<sup>(38)</sup>

ところが、我妻は、歳を重ねるにつれて、方言が目立つようになり、郷里・米沢に対する愛着も強くなってゆき、あるいは卒業生への定番の贈り言葉であった「井戸を掘れ」についても、昭和40年68歳の文章では、「われわれ東北人こそ、黙々として井戸を掘るに最も適した、気のきかない性格を与えられている」と思っている

(37) 岩松三郎「法制審議会と特別顧問」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注(63)308頁。

(38) 我妻堯「米沢と我妻栄——父を語る」『我妻栄——人と時代』前掲注(32)263頁……〔再録〕『我妻栄講演集・母校愛の熱弁——付・米沢有為会文化講演』（財産法人・自願奨学財団理事会、平成12年）148頁。『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注(63)「Ⅱ 1923〔大正12年〕～1929〔昭和4年〕」扉頁（62頁）の口絵写真や、我妻栄記念館だより17号（平成24年）1頁の「1926年〔大正15年〕2月婚約時代」の緑と2人で写った写真を参照。

と書き添えるなど、自らを（ステレオタイプのな外部評価通りの）「東北人」として自己規定する方向に進んだように思われる。

## （2）「米沢」出身

【61】 ところで、同じ東北出身で親近感が湧くといっても、我妻の山形県と、金田一他人の岩手県と、仁井田益太郎の福島県では、県民性にかかなりの違いがある。しかも、県によっては、県内で気質が異なる場合もある。その原因は、気候や主要産業の違いのほか、廃藩置県が影響しており、金田一の岩手県については、盛岡藩がそのまま県に移行したため、気質が県内で比較的均一であるのに対して、仁井田の福島県は、奥羽山脈と阿武隈高地により地勢的に分割されていた①陸奥国・②岩代国・③磐城国の諸藩が、①若松県・②福島県・③磐前県を経て、福島県（①会津・②中通り・③浜通り）に合したため、各地方で相当程度の違いが存在する（なお、仁井田は②現在の中通り・旧守山藩の出身）。

仁井田の福島県と同様に、我妻の山形県も、地勢的・歴史的には、①日本海沿岸の平野部（庄内平野）の「庄内地方」と、内陸部の3つの盆地——北から順に、②最上盆地（新庄盆地）の「最上地方」、③山形盆地（村山盆地）の「村山地方」、④長井盆地・米沢盆地の「置賜地方」の4つの地方に分かれる。

【62】 我妻と一高・東大同期の齊藤直一の追想には——、

今から60年前大正3年9月に旧制一高独法へ入学したとき、同級40名のうちに同じ山形県人が3名居た。米沢市出身の我妻栄君、村山出身の安孫子理兵衛君それに当時はまだ行ったことがなかったけれども父の郷里東村山郡楯山村（今の天童市）に本籍のあった私であった。

——とあるが、安孫子理兵衛や齊藤直一の父・齊藤十一郎の育った村山地方と、庄内地方・最上地方・置賜地方では、住民の気質が大きく異なる。

① 庄内地方——藤沢周平（1927-1997. 鶴岡出身）の歴史小説の舞台「海坂藩」のモ

(39) 我妻栄「井戸を掘れ」『民法と五十年（その3）随想拾遺（下）』（有斐閣、昭和51年）287頁。「出典不明」とあるが、米沢あるいは東北の若者に向けて書かれた文章のようである。

(40) 齊藤直一「一高で知り合ってから」『追想の我妻栄』前掲I注（63）29頁。

(41) 山形県平民・斎藤太の二男、慶応3・8・10（1867・9・7）生、明治24年帝国大学法科大学卒業、26年検事任官、同年東京地方裁判所判事、横浜地方裁判所部長、東京控訴院判事、明治33年独逸差遣、明治33年東京控訴院部長、司法参事官兼大審院判事、大正9・6・11没。

デルである庄内藩は、譜代大名・酒井氏が鶴岡の鶴ヶ岡城を藩庁とし、酒田の支城・亀ヶ城に居を構える支藩・出羽松山藩を擁していた。同藩は、戊辰戦争で会津藩と結んで維新政府と対立、敗戦後、会津藩は廃藩となるが、庄内藩は大泉藩として存続し、廃藩置県で大泉県となる。一方、支藩・出羽松山藩は松嶺県となるも、明治4年両県は合併して(第2次)酒田県となる。その後、明治8年に県庁を酒田から鶴岡に移して鶴岡県に改称した後、翌明治9年に③(旧)山形県・④置賜県と合併してできたのが現在の山形県である。庄内地方・鶴岡出身の著名人には、高山樗牛(1871-1902)、相良守峯(1895-1989)のほか、憲法学者・佐藤丑次郎(1877-1940)や最高裁判事・斉藤悠輔(1892-1981)がいる。

② 最上地方——江戸時代この地方を支配したのは、戸沢氏の新庄藩である。戊辰戦争時には最終的に新政府側につき、明治4年廃藩置県後は新庄県となるが、同年のうちに③(旧)山形県に編入された。最上地方・新庄出身の著名人には、平塚広義(1875-1948)、折下吉延(1881-1966)、松田甚次郎(1909-1943)がいる。<sup>(42)</sup>

③ 村山地方——江戸期にこの地を統治したのは、最上義光を藩祖とする山形藩であるが、その後藩主は目まぐるしく入れ替わって幕末には水野氏となり、天領であった寒河江を中心に明治2年に設置された(第1次)酒田県と、明治3年に合併し県庁を山形に移して(旧)山形県となり、明治9年①鶴岡県・④置賜県と合併して現在の山形県となる。なお、山形中学は、法学者では安達峰一郎(1869-1934)・大場茂馬(1869-1920)を輩出した名門であるが、同校は山形県師範学校の中学師範予備科が明治17年に分離・独立したもので、県庁所在地の利を活かして発展した比較的新しい学校である。<sup>(43)</sup>

④ 置賜地方——山形県南の置賜地方は、上杉景勝を初代藩主とする米沢藩の治めた地域である。上杉家は、関ヶ原の合戦で西軍について会津を没収されたうえ、4代藩主・綱憲(吉良上野介義央の長男で上杉家の養子となる)の代に信夫郡・伊達郡も失い、所領は上杉景勝の筆頭家老・直江兼統の治めていた置賜地方だけになる。

置賜地方は、さらに、①米沢を中心とする南置賜地方、②南陽市を中心とする東

(42) このほか、山形県人で唯一の総理大臣・小磯国昭(1880-1950)は、旧新庄藩士・小磯進の長男で、出生地は栃木県宇都宮ながら、新庄小学校・上山小学校から山形中学に進んだ。

(43) 長岡安太郎『明治期中学教育史——山形中学校を中心に』(大朋堂、平成3年)。

置賜地方、㉔長井市を中心とする西置賜地方に分かれ、㉕東置賜地方は現在では㉔米沢都市圏となっている。

【63】 以下では、まず、我妻が米沢市の市制施行70周年記念の写真集に寄稿した文章を引いておこう。<sup>(44)</sup>

60歳をすぎると、身体は昔にもどるのであろうか。まず第1に、言葉である。米沢弁が急に多くなる。17の年に東京に出て、それから今日まで、東京で暮らした月日の方が遙かに多いのだが、郷里のナマリは容易にとれなかった。それが60歳を過ぎると、あたかも安いメッキがはげるように、もとにもどるのだから、全く不思議である。

記憶もそうである。小学生のときに、ヤスをかかえてカジカつきに走って通ったタンポの姿や、館山から小野川に通う道から見えたヨロイハゲの赤い土の色、道の端を流れる清流の岸に咲くトリカブトの紫色などが、強い想出となって浮かんでくる。その後、幾度も同じ場所を訪れて、昔とは全く違った景色になっていることを知っているはずだが、新しい景色の方は、どうしても記憶に残らない。一昨年アメリカからヨーロッパを廻ったとき〔我妻は昭和32年3月東京大学退官後、6月15日から10月20日まで妻・緑と二人で欧米を旅した〕、ことにノールウェーの中部を旅行したとき、折にふれて、昔の記憶が浮んできた。むろん、山の形も違うし、散在する家屋の姿も全く別なのだが、それでいて、時折、記憶に残る郷里の山河のなつかしい姿——というより、山河を眺めていた時の楽しい気分がよみがえってきた。全く不思議なものである。

食べ物もそうである。近頃、昔の味を思い出して、むやみになるかしくることが多い。それも、容易に手に入らないものばかりである。例えば、ウバ貝。これは、先年北海道に行ったときに、ホッキがあるのだからウバ貝もあるだろうと、デパートを探したが、手に入らなかった。それから、ジギリ、ことにその吸物。あのうすい塩味は、「アラマキ」などでは駄目だ。北欧特産の鮭のクンセイに、なまなましい塩のごくうすいものがある。それでニギリ寿司を作ると、マグロの味がするといっている人があった。わたしはこれで吸物をつくったらジギリの吸物の味がしようと考えたが、旅先のこととて、

(44) 我妻栄「ふるさとの色・ふるさとの味・ふるさとの人」米沢市制施行70周年記念実行委員会（編）『わが故里のさち——カメラで見た新米沢風土誌』（米沢市役所、昭和34年）「記念論文集（米沢の思出を語る）」14-16頁。なお、この文章については、我妻洋＝唄孝一（編）『我妻栄先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲I注(3)（64-67頁）に挙示されていないので、多少長くなるが、全文を転記しておく。

残念ながら試みることはできなかった。

私の家では、朝は、一家全部、女中さんまで、パン。昼は大学か役所で、洋食かサンドウィッチ。夜だけ米飯、これも普通一碗。味噌汁は2日に一碗ぐらい。だから、外国を旅行しても、食事には少しも困らない。それでいて、郷里の幼い時の味も想い出すのだから、面白いものである。

おそらく、記憶に残る味と現実の味とは、違うのだろう。現に、ヒヤ汁〔日本の他地方の冷や汁と異なり、米沢のそれは、出汁の利いた具だくさんの野菜のお浸しである〕やアヒルのタタキは作ってみることもあるが、どうも記憶に残る味は出てこない。米沢の野菜でなくちゃダメだ。鉄砲屋町の川でガアガアとなきながら育ったアヒルがとくにうまいんだ、という、妻や子供は笑って相手にしない。

食べ物の話ばかりするのは気がひける。少し上品な話をしよう。

年をとると、当然のことながら、活動力がにぶる。やる仕事に、これまで通りの巾と深さをもたせることは、できなくなる。そこで、深さを残して巾を狭めるか、巾をそのままにして深さを浅くするか、どっちかの道を選ばなければならなくなる。どっちを選ぶかは人の性質によろう。どっちが正しい、どっちがえらいともいえない。

私自身は、巾を狭める方針をとっている。専ら学問を研究する世界に生きる。法律についての啓蒙も大切な仕事であり、学生を教育することも、重要な仕事に相違ない。しかし、通俗講演も、大学の講義も、一切断って、研究の生活に生きることにしている。その上その研究も、自分の専門に最も近いところに限定する。そのために、各省の委員会も、直接に専門に関係のないものは、全部断っている。

もっとも、この原則を貫くことは、なかなか容易でない。ことに、ジャーナリズムは、珍しいものを食い散らかすという悪いくせがあって、断われれば断わるほど、しつこく追ってかけてくる。ラジオもテレビも新聞も、一切お断り、という方針は、ほぼ貫いているが、どうかすると例外ができて弱っている。政府の委員会となると、断るのがさらに困難になるときがある。法制審議会は、専門のもので、私の余生を捧げる仕事だから別として、その他の委員会は断る方針なのだが、先日も原子力災害補償専門部会の部会長を引き受けさせられた。しかしその他は一つもない。

そこで、郷里の方々に対してお願いがある。

郷里からくる手紙は——親しい人の私信はむろん別として——名士あつかいにしたい

いろの頼みと寄附の求めとが大部分で、稀に法律問題の質問と就職の世話の頼みである。

このうち、法律問題の質問をお断りするのが一番易しい。私は、弁護士登録をしていないから、具体的な事件の相談にはのれない。それをやっては、弁護士法違反になる、といえよ。

就職の世話は一番困る。郷里の方々は、顔が広いと思っておられるらしい。30年の間に教えた学生の数はおびただしい。それが官庁に会社に銀行に勤めている。相当えらい地位になっている者もある。至るところに教え子があり知人もあろう。と考えられるのは決して無理ではない。しかし、毎年何百人の学生に講義して、顔も名前も覚えずに世の中に送り出す法学部の教授は、宿屋の主人、いや西洋流のホテルの支配人のようなものである。就職を頼みこむほどの親しさをもつ者は、広い世間に一人もないといってよい。

名士あつかいにして、郷里に対する希望を述べろ、写真を送れ、揮毫を頼む、訓示を送れ、といわれるのも困る。名士あつかいにされるから、寄附を求められるから名士になるのか、そこのところの因果関係はよくわからないが、どうもこの二つは、不可分の関係にあるらしい。

しかし、私個人についていえば、この二つは分離してもらいたい。応分の寄附は喜んでする。乏しい家庭に育ち、恩師、恩人、育英会と、他人の厚意によって人となり、多少なりとも余裕のある今日、郷里といわず、世の慈善的な事業には、及ばずながら応分の寄与をする心構えを失わないようにつとめている。

ただ、名士あつかいだけは、勘弁して頂きたい。学問の世界の片隅に、狭く深い研究の生活を、静かに送ろうとしている私の願いを遂げさせるために。

なお、この文章が掲載された米沢市制施行70周年記念写真集には、我妻と同じく郷里の「名士」である浜田広介や大熊信行も文章を寄せているのだが、二人の文章とは対照的に、我妻の文章の後半部分——とくに「そこで、郷里の方々に対してお願いがある。」以下の部分——は、かなり刺のある、ささくれだった印象を受ける。米沢の関係者あるいはこの文章の執筆依頼との関係で、何か不快な出来事でもあったのだろうか。それとも、この市制施行70周年の祝辞にいささか似つかわしくない「お願い」は、我妻の生来の辛辣な性格（後記【84】参照）が出たものか。

#### ア 我妻出生当時の米沢の概況

【64】 我妻が生まれ育った頃の米沢市の様子については、我妻の出生当時に使用さ

れた、米沢の尋常小学校高等科1年生用『郷土地理歴史』教科書の記述を引用しておこう。<sup>(45)</sup>

## 第六 米沢地方

### 一、米沢市

米沢市ハ吉嶋ノ南二里ニアリ人口凡三万大抵商業工業ヲ営ミ市外繁華ナリ、織物、生糸、蚕種、漆器、筆、烟草、ハコノ地ノ名産ニテ殊ニ織物ノ業ハ鷹山公ノ時ヨリ興リ漸盛ニナリテ今ハ米沢織ノ名頗ル高シ。コ、ニ市役所、裁判所、警察署、監獄署、郵便電話局、尋常中学等アリ

市トハ人家集合シ商業盛ニ行ハル、都会ヲイフ、コ、ニハ市長アリテ市中ヲ支配ス<sup>(46)</sup>市ノ中央ニ松岬〔まつがみさき〕公園アリ元ノ米沢城ノアリシ処ニテ周囲ノ濠堤上ノ老松尚ホ色アリ内ニ県社上杉神社ヲ安ズ傍ニ招魂碑アリ曠山公ノ碑アリ。招魂碑ハ明治戊辰ノ役ニ忠死セシ靈ヲ祭ルモノニシテ今又日清戦争ノ忠死者ヲモ祀祭セリ曠山公ハ米沢城最後ノ主ナリ<sup>(47)</sup>

米沢城ハモト大江時広ノ築ク処ニテ松岬城ト称セリ上杉氏ノウツリ居ルニ及ビ舞鶴城ト改ム明治維新ノ際廢城タリ

上杉神社ハ上杉輝虎及治憲両公ヲ祀レルモノナリ。輝虎ハ上杉氏ノ祖、実ハ長尾氏謙信ト号シ最モ軍事ニ長シ越後ヨリ起リテ四方ヲ略取セリ。治憲ハソノ十世ノ孫実ハ日向ノ秋月氏ヨリ出ツ鷹山ト号ス自節儉ヲ行ヒ文学ヲ起シ農工業ヲ勸ム米沢中興ノ主ニテ置賜ノ民今尚ソノ徳ヲ仰ク

市ノ東部花沢ニ佐氏泉〔現・佐氏泉公園〕アリ老松ノ蟠ル所、冷水川ヲナシテ湧キ出

(45) 和綴本、丁数表示なし。表紙の記載を転記すれば『東置賜郡洲嶋尋常高等小学校撰定／郷土地理歴史／米沢市門東町知新堂発行』、また、奥書には「明治29年6月20日印刷／全年6月22日発行」「著作者 山形県南置賜郡南原村南原笹野町／2973番地／小嶋虎太郎」「発行兼印刷者 全県米沢市門東町下ノ町3025番地／須佐権平」とある。著者の小嶋は、洲嶋尋常高等小学校の訓導〔教諭〕で、「緒言」によれば、「本書ハ洲島尋常高等小学校高等科第1学年前半期ニ用キル郷土地理歴史ノ教授草稿ヲ生徒筆記ノ勞ヲ省カム為ニ印刷ニ附シテ配付」したものであるから、本書の使用が開始されるのは、我妻が生まれた明治30年4月ということになる。

(46) 【七戸注】当時の米沢市長は大瀧龍蔵、助役は宇佐美駿太郎である。なお、米沢に市制が施行されたのは明治22年4月1日（金田一他人の盛岡と同日）。これに対して、岸信介が中学時代を過ごした山口の市制施行は昭和4年4月10日である。

(47) 【七戸注】「曠山公」とは、米沢藩第12代藩主（上杉家第13代当主）上杉斉憲（うえずぎ・なりのり。1820-1889）。戊辰戦争の責任をとって（米沢藩は盟藩・会津藩を見捨てて官軍側についた）、家督を長男・茂憲（もちもり。1844-1919。【67】I①）に譲り隠居。

テ最納涼ニ適ヘリ昔ノ佐藤氏〔源義経の忠臣・佐藤継信・忠信兄弟の一族〕ノ庭池ニ  
テソノ館趾ハ近傍ニアリ

市ノ西部館山ニ米沢製糸場アリ数百ノ工女アリテ甚タ盛ナリ

近傍ニ伊達氏ノ霞ヶ城趾アリ

### イ 我妻出生当時の米沢の総戸数と内訳

【65】 我妻が生まれた5か月後に刊行された『市民必携米沢通覧』<sup>(48)</sup>によれば、当時の米沢市の総戸数は5319戸で、戸主の族籍は、華族1人（旧藩主の伯爵・上杉茂憲）、士族3770戸（うち女戸主184人）、平民3323戸（うち女戸主462人）である（士族と平民の比率は53.1%対46.8%<sup>(49)</sup>）。

一般に城下町では、（当然のことながら）士族の比率が高くなるが、全国<sup>(50)</sup>の城下町の中でも、米沢城下における士族の比率は格段に高い<sup>(51)</sup>。その原因は、上杉景勝が米沢に減転封される前の、会津統治時代の家臣団を、上杉家が江戸期を通じてそのまま維持し続けたためである。そして、そのことが、江戸期における米沢藩の困窮を招いた最大の原因であった<sup>(52)</sup>が、この士族の多さは、驚くべきことに、我妻が中学

(48) 表紙には「成田宗雄・桜井美成校／石田春雨編／市民必携米沢通覧／発行所 素月書店」とあり、奥付には「明治30年9月15日印刷／明治30年9月19日発行／編輯者 石田勘四郎／発行者 素月晨平」「発行所 素月書店」とある。

(49) なお、これより7年前の明治23年の数字に関して、表渡部忠吉＝青木昭博（解説）『米沢製糸場関係史料・明治前期行政資料（米沢市史編集資料20号）』（米沢市史編さん委員会、昭和62年）「山形県米沢市政表（山形県米沢市役所、明治23年4月調製）」252頁は、士族3959戸に対して平民2901戸としている（57.7%対42.3%）。

(50) なお、郡部も含めた置賜地方全体の比率に関しては、置賜県時代の古い数字であるが（明治7年2月28日）、戸数ベースで士族6009名（うち女戸主4名）、平民1万7443名（うち女戸主237名）、人数ベースで士族2万6834人（男1万3150人・女1万3584人）、平民13万1910人（男6万7230人・女6万4680人）、士族と平民の割合は、戸数ベース25.6%対74.4%、人数ベース16.9%対83.1%である。渡部忠吉＝青木昭博（解説）『米沢製糸場関係史料・明治前期行政資料（米沢市史編集資料20号）』（米沢市史編さん委員会、昭和62年）「置賜県一覽表」208頁、チャールズ・H・ダラス／松野良寅（訳）「街道旅案内付・置賜県収録」『幕末から明治初期にかけての教育事情（米沢市史資料8号）』（米沢市史編さん委員会、昭和57年）48頁。

(51) なお、内務大臣官房文書課『明治30年12月31日調日本帝国民籍戸口表』……〔復刻版〕『国勢調査以前日本人口統計集成4（明治26年～30年）』（原書房、平成4年）によれば、当時の日本全体の華族は4523人、士族は208万9134人、平民は4113万5206人（「第1 総数」1頁）、山形県全体の族籍別の戸数は、華族2戸、士族1万0914戸（うち女戸主623戸）、平民12万8822戸（うち女戸主5472戸）であり（「第8 人口族籍別」73頁）。当時の華士族と平民の比率は、全国平均で4.8%対95.2%（人数ベース）、山形県全体で7.8%対92.2%（戸数ベース）ということになる。

(52) 上杉家の米沢減転封前（会津時代）の石高は120万石であったが、米沢の石高は15万石。にもかかわらず、家臣団（士族）の数は、明治2年当時で6700余人と、福岡藩（46万石）と同規模

3年になった明治末年（45年）になっても変わらないのである。<sup>(53)</sup>

### 三百年來土着して動かぬ

謙信公の余瀝を受け、鷹山神君の恩沢を蒙り、事業に従事するを知られる米沢武士は、廢藩置県の覚醒期に遇ふも他藩の藩士の如く泣きの涕で零落其影を見ざるが如き醜態を学ばず。6000の士族今尚巖然として舞鶴城下に旧態を保つ。其他三置賜に先祖の家を守るもの多し。全国其比を見ざるは地上等しく知る処なるが、今市郡別を以て現在住する士族の人員を示せば、米沢市男9411人、女9520人、東置賜郡男848人、女799人、西置賜郡男1095人、女1150人、南置賜郡男2645人、女2603人なりと。

一方、我妻が生まれた当時の米沢の人口は3万1207人で、男1万5446人、女1万5761人と、女性の人口が多いのは、主要産業が織物・生糸のためであろうが、米沢織をはじめとする伝統産業を江戸期に興し、過剰な家臣団を抱え込んで破綻した藩の財政を立て直したのが、「米沢中興ノ主ニテ置賜ノ民今尚ホソノ徳ヲ仰ク」ところの、米沢藩（藩祖は上杉景勝）第9代藩主（謙信に始まる上杉家第10代当主）上杉治憲（鷹山）である。

上記ア『郷土地理歴史』教科書に「〔①〕自節儉ヲ行ヒ〔②〕文学ヲ起シ〔③〕農工業ヲ勸ム」とあるように、鷹山の事蹟は、①大儉約令を発して過剰な家臣団の支出を抑制し、②第4代藩主・上杉綱憲の開いた学問所を再建して藩校・興讓館を興し、③家臣団を挙げて新田開発・堤防修築に取り組むとともに、家臣団の婦子女に内職として機織りを修得させたことにある。

そして、こうした鷹山の遺徳は、維新時の藩主にも受け継がれた。

【66】 このうち我妻の母校の淵源である②興讓館について触れておくと、戊辰戦争により中断されていた講義は明治2年には再開され、明治4年になると米沢・興讓館構内に洋学舎が設置されチャールズ・ヘンリー・ダラスが招聘されて英学教育も開始された。翌明治5年の学制施行によって、全国の他の旧藩学（県学）と同様、

---

の多さであった。松尾正人「府県政の展開と旧藩士族——置賜県を中心にして」中央大学文学部紀要145号（平成4年）139頁。

(53) 米沢日報明治45年7月19日「米沢士族の数」……〔所収〕『新聞・雑誌資料集成——明治の米沢（米沢市史編纂資料22号）』（米沢市史編さん委員会、昭和63年）「485」235頁。

(54) 『市民必携米沢通覧』前掲注（48）3頁。ちなみに、今日の米沢市の人口は、令和3年4月の推計で8万700人、男3万9995人、女4万705人で、やはり女性が多い。

興讓館もまた廃止を余儀なくされるが、しかし、山形県内の他の藩校がそのまま途絶えたのに対し、米沢においては、明治7年上杉家が運営費用を拠出して旧米沢藩士協立の「私立米沢中学校」が設立された点が異なる。山形県最初の中学校である。ちなみに、米沢の教育は、明治初年より山形県下1番<sup>(55)</sup>であって、明治9年の東京曙新聞は、次のように報じている。

○学校は盛なり。中学校あり、英学あり、小学校は93あり、中小合せて生徒8770余人なり。当時当県学校の盛なるは古より未曾有なりといふ。加ふるに客月県官親しく管内巡視の上、奨励して優等のものを賞賜せられたり。於是か諸生徒益々勉強す。就中館山郡の霞城学校は県内の尤も盛なるものなり。此頃生徒の人数増殖し校内狭きが故に、同郷の一庭山へ新築になる由

だが、当時の私立の中学では、徴兵猶予の特典や、上級学校への進学資格が得られなかった。そのため、同校は、明治26年県費の補助を受けて半公立化したが、しかし、引き換えに「興讓館」の名を捨てざるを得なくなる（「米沢尋常中学校」）。2年後の明治28年には再び藩校の名を冠するも（「米沢尋常中学校興讓館」）、明治33年の完全公立（県立）化の結果、校名は「山形県米沢中学校」、翌明治34年には「山形県立米沢中学校」となる。

その後は、昭和4年になって「興讓館」の名が復活するが（「山形県立米沢興讓館中学校」）、戦後昭和22年の新制高等学校の名称は「山形県立米沢第一高等学校」。校名に再び旧藩校の名を冠するようになるのは、我妻が東大を退職する前年（昭和31年）のことである（現校名「山形県立米沢興讓館高等学校」に改称）。

#### ウ 我妻出生当時の米沢の名望家

【67】 再び我妻の出生当時に話を戻せば、前記明治30年『市民必携米沢通覧』は、「地勢」「戸口」「市町大字」に続けて「出身有名家」なる項目を立て、「貴族院議員」「衆議院議員」「勅任官」「武官」「博士」「学士」「金鷄勲章」「実業家」を掲げている。

次頁以下に一覧を掲げておくが、要するに、こうした地位にある人びとが、我妻出生当時の米沢市民の考える「立身出世」を遂げた人物ということになる。

(55) 東京曙新聞明治9年5月31日「置賜県雑記」……〔所収〕『新聞・雑誌資料集成——明治の米沢（米沢市史編纂資料22号）』（米沢市史編さん委員会、昭和63年）「3」2頁。

## 明治30年『市民必携米沢通覧』8-12頁「◎出身有名家」

\* 氏名の下の記事は同書掲記（＝明治30年当時）の肩書

I 貴族院議員	
① 上杉茂憲 伯爵	(1844-1919)。上杉家第14代当主、米沢藩第13代藩主。戊辰戦争の敗戦で斉憲から家督を継いだ茂憲は、明治4年の廃藩置県の際、旧藩主東京在任の命により、同年9月9日に米沢を出立するが、その際、米沢の士民は沿道の両側に平伏して声を呑み別れを惜しんだという。明治5～6年の英国遊学（千坂高雅（後出I③）が随従）の後、明治9年宮内省に出仕、明治14年には沖縄県令となる。明治16年元老院議員、17年伯爵、23年貴族院議員、錦鶏間祇候となるが、明治29年南堀端町（松が岬公園の南・二の丸趾）に居宅を新築して7月11日米沢に戻った。常に「自分は謙信・鷹山の末裔である」との責任を感じ続け、「自分は民の父母でなければならぬ」との使命感の下に、私財をなげうって教育の振興と産業の発展に努めた。教育の振興（明治初年の洋学教育から明治7年私立米沢中学校の設立）は、家臣団の子弟の中央における就職口確保につながり、産業の振興（明治10年設立の米沢製糸場など）は、地元に残った家臣団の授産となった。
② 平田東助	(1849-1925)。米沢藩医・伊東昇迪（長崎・鳴滝塾でシーボルトに学んだ蘭医）二男、嘉永2・3・3（1849・3・26）生、藩医・平田亮伯の養子となり、興譲館から、幕末・維新時に上杉家が設けた英学塾に学んで、明治2年5月大学南校に進む。明治4年岩倉使節団に随員して渡欧、明治5年ベルリンで長州出身の品川弥二郎・青木周蔵の知遇を得て、ドイツで政治学・法学を学び、ハイデルベルク大学で日本人としてはじめて博士号を取得（法学博士）。明治9年帰国後は、朝敵・米沢藩出身ながら、品川・青木以来の長州系の人脈を背景に、法務官僚として累進、山県有朋の腹心として（平田東助が明治12年2月に結婚した品川弥二郎の養女・達子は、山県有朋の姉・寿子の子で、兄・伊三郎は山縣有朋の養嗣子、姉・静子は品川弥二郎の妻）、明治23年帝国議会開設時に貴族院議員勅選、枢密院書記官長を兼官、明治31年法制局長官、34年第1次桂太郎内閣の農商務大臣、35年男爵、41年第2次桂内閣の内務大臣、44年子爵、大正11年内大臣、伯爵、大正14・4・14死去。
③ 千坂高雅	(1841-1912)。米沢藩国家老（千坂家は上杉謙信以来の譜代の家臣）千坂高明の長男、天保12・閏1・19（1841・3・11）生、興譲館に学び、維新後は主君・茂憲の随従として洋行、明治12年石川県令、16年岡山県令、明治27年貴族院議員に勅選。その後は実業界に入り、横浜倉庫、東京米国商品取引所、両羽銀行（現・山形銀行）等の重役を歴任。大正1・12・3死去、享年72歳。

④	宮島誠一郎	(1838-1911)。天保9・7・6(1838・6・25)米沢藩中士の家に生まれる。興議館に学び、幕末には藩命を帯びて京都・江戸で活躍。勝海舟の知遇を得て、維新後は明治政府に出仕し、明治29年貴族院議員に勅選。米沢が海軍に多くの人材を輩出したのも、彼と勝とのコネクションといわれる。明治44・3・15死去、享年74歳。
II 衆議院議員		
①	山下千代雄 山形県選出	(1857-1929)。「人事興信録(第5版)」(人事興信所、大正7年)や93頁「君は旧上杉藩士山下誠次郎の長男にして安政4年9月10日を以て生る幼にして藩校興議館に学び後司法省法学生徒〔速成科第2期生〕として明治16年卒業し翌17年米沢に帰り明道館を創立して自由民権を首唱す同31年憲政党内閣成るや内務省県治局長に任じ正五位に叙せらる先是同23年第1回衆議院議員総選挙以来毎回競争場裡に立ち当選すること6回自由党の創立より立憲政友会員として常に政党政治の完成と根本的日支親善問題即ち支那国民教育に努力せり現時弁護士特許弁理士として盛名あり」。
②	桜井義起 大阪府選出	(1849-1940)。明治25年徳島県警察部長、内務書記官から、西武鉄道専務取締役・社長、明治41年大阪自動車株式会社を設立し社長、昭和15・5・18死去。ただし、衆議院・参議院『議会制度百年史——衆議院議員名鑑』(衆議院・参議院、平成2年)295頁は大阪府出身とし、『続・米沢人国記(近・現代篇)』米沢市史編集資料12号(昭和58年)「衆議院議員略歴」371頁以下に記載はない。
III 勅任官		
①	平田東助 枢密院書記官長	前出I②
②	小倉信近 台湾嘉義県知事	(1849-1926)。嘉永2・4・22(1849・5・14)代々米沢藩士の旧家に生まれ、明治5年海軍少尉から内務省に転じて警部・警視を経て、明治29年福島県知事、翌30年台湾・嘉義県知事、31年衆議院議員(山形県2区・憲政党)、33年三重県知事から群馬県知事、34年司法省官房長。明治35年教科書疑獄事件で重禁固2か月。
IV 武官(大尉以上)		
①	小森沢長義 海軍主理	(1843-1917)。宮島誠一郎(前出I④)の弟。明治4年の海軍省入りは兄・誠一郎と親しかった勝海舟(海軍卿)の斡旋による。明治12年太政官権大書記官兼海軍大書記官、米沢海軍の始祖と称される人物。
②	草刈義哉 陸軍軍医監	(1847-1917)。医号・道倫、明治29・3・30陸軍軍医監、大正6・2・21病没。
③	佐藤吉徳 陸軍中佐	(?-)。明治28・3従六位勲四等、明治28・9・17陸軍歩兵中佐、明治38・11・14陸軍歩兵大佐。

④	石原忠俊 海軍少佐	(1850-1914)。海軍兵学校〔海兵〕5期(明治11年)卒、明治29年海軍少佐・予備役編入、大正3・11・1病没。
⑤	島良忠 陸軍少佐	(?-1904)。島家は直江兼統の家臣、明治28・3・17少佐、明治37・11・11没。
⑥	大熊淳一 陸軍少佐	(?-)。陸軍歩兵少佐(歩兵第5連隊付)。
⑦	高橋秀松 海軍薬剤監	(1854-1914)。医号・玄迪、安政1・8・24(1854・10・15)生、三瀧白圭〔玄寿。緒方洪庵門下〕の二男、長男は三瀧謙三(三瀧信三の父。明治9年東京医学学校卒)、明治12年東京大学医学部製薬科卒、海軍薬剤中監、帝国生命専務、薬学博士、大正3・2・9病没。
⑧	下條於菟丸 海軍機関少監	(?-1920)。明治6年海軍兵学校入寮、明治41年8月海軍機関少将、海軍機関学校長、大正9・2・28没。
⑨	海瀬敏行 陸軍一等軍医正	(?-1904)。大学東校、明治5年文部省11等出仕、10年軍医副、著書に海瀬敏行『原病学摘要』(山県県病院、明治9年)、明治37・7・27没。
⑩	林代次郎 陸軍二等軍医正	(?-)。明治27・11・15陸軍二等軍医正、明治30・8山形衛戍病院長。
⑪	幸坂昌猷 陸軍大尉	(?-1901)。明治23年予備役、明治34・7・15没。
⑫	岩井忠直 陸軍大尉	(?-)。宮島誠一郎(前出I④)の妻やよの弟、岩井勘六(陸軍少将)は長男、陸軍憲兵大尉。
⑬	佐藤兼毅 陸軍大尉	(1862-1921)。米沢藩士・浅間嘉右衛門の二男、文久2・10・23(1862・12・14)生、陸軍士官学校〔陸士〕旧8期・陸軍大学校〔陸大〕10期(明治29年卒)、明治34・8・17台湾守備混成第2旅団参謀、明治40年歩兵大佐、大正2年少将、大正10・11・16没。
⑭	船尾鉄腸 陸軍大尉	(?-)。陸士2期(明治24年卒)、野砲第20連隊長、少将。
⑮	香坂仁助 陸軍大尉	(?-1904)。陸軍歩兵少佐、明治37・10・30盛京省大孤山北麓野戦病院にて銃創により死去。
⑯	船尾祐次 陸軍大尉	(?-)。陸士旧9期・陸大12期(明治31年卒)。
⑰	山下源太郎 海軍大尉	(1863-1931)。文久3・7・30(1863・8・26)米沢藩の上士の家に生まれる(父は厩方)。興讓館、米沢中学校から、海兵10期(明治16年卒)、大正7・7・2大將、連合艦隊司令長官、妻は宮島誠一郎(前出I④)の娘、昭和6・2・19病没。
⑱	釜屋忠道 海軍大尉	(1862-1939)。文久2・9・13(1862・11・4)生、幼名源五郎、海兵11期(明治17年卒)、大正3・12・1中將、手旗信号の考案者として知られる。昭和14・1・19病没。

⑲	黒井悌次郎 海軍大尉	(1866-1937)。慶応2・5・22(1866・7・4)生、海兵13期(明治20年卒)・海軍大学校〔海大〕甲号5期(明治26年卒)、大正9・8・16大将、昭和12・4・29病没。
⑳	井内金太郎 海軍大尉	(?-1931)。海兵13期で⑲黒井悌次郎と同期、大正4年少将・予備役編入。昭和6・5・18没。
㉑	上泉徳弥 海軍大尉	(1865-1946)。慶応1・9・25(1865・11・13)生、海兵12期(明治19年卒)・海大将校科1期(明治29年卒)、妻まさは宮島誠一郎(前出I④)の長女、大正3・12・1中将・予備役編入、昭和21・11・27没。
㉒	下坂智次郎 海軍大尉	(?-1936)。海兵14期(明治20年卒)、中将、海軍兵学校長、昭和11年2月23日没。
㉓	釜屋六郎 海軍大尉	(1868-1940)。⑱釜屋忠道の弟、海兵14期(明治20年卒)鈴木貫太郎と同期、大正9・8・1中将、昭和15・8・15病没。
㉔	下條小三郎 海軍大尉	(?-1938)。海兵15期(明治22年卒)岡田啓介と同期、中佐、明治45年病気のため予備役編入。昭和13・12・2没。
㉕	山崎金一 海軍大尉	(?-1941)。海兵16期(明治23年卒)、中佐、大正2年病気のため予備役編入。昭和16・12・9没。
㉖	大瀧道助 海軍大尉	(1868-1911)。海兵17期(明治23年卒)秋山真之と同期、中佐、第12駆逐艦隊司令となるも、明治44・11・23駆逐艦春雨沈没により死去。
㉗	入澤敏雄 海軍大機関士	(1868-1939)。海軍機関学校旧4期(明治20年卒)、大正5年海軍機関中将、大正6年予備役編入、昭和14・1・1病没。
V 博士		
①	櫻村清徳 医学博士	(1848-1902)。米沢藩医(外様法体〔御側医格〕の家)櫻村清秀の子、興譲館から幕府の医学所を経て大学東校卒、明治7年東京医学校教授、12年大学医院内科部長、14年(旧)東京大学医科大学教授となるも、19年辞職して神田駿河台に山竜堂病院を創設、明治35・7・11没。
②	平田東助 独逸法学博士	前出I②。
VI 学士		
①	香坂駒太郎 法学士	(1858-1923)。香坂家は上杉景勝以来の上杉家譜代の家臣、香坂七郎の長男、安政5・1・1(1858・2・14)生、明治17年東京大学法学部卒、卒業後は検事・判事を歴任、明治39年韓国統監府法務院長、大審院判事を経て、大正5年山形銀行第4代頭取。
②	芹沢孝太郎 法学士	(1866?)。芹沢家は米沢藩の御馬廻25石の家、父・芹沢政温は、維新後上杉斉憲の御近習となり、置賜県権参事から判事に転じて大審院判事まで累進した人。政温の長男として慶応2・4・15(1866・5・29)生、明治23年帝国大学法科大学法律学科第1部〔英法科〕卒、原嘉道・柴田家門・石井菊次郎らと同期、卒業後は東京で弁護士となる。

③	山崎哲蔵 法学士	(??.)。上杉家家従、明治25年帝国大学法科大学法律学科参考科第1部〔英法科〕卒、水野鍊太郎・高根義人・山座円次郎のほか平岡定太郎（平岡梓の父・三島由紀夫の祖父）と同期、卒業後は文部省に入省、訳書にラートゲン（述）・山崎哲蔵（訳）『政治学——一名・国家学』（明法堂、明治24年）。
④	脇本彬 法学士	(1865-?)。士族・脇本幾助の長男、慶応元年7月生まれ、明治25年帝国大学法科大学政治科卒、内務省に入省し、鳥取県参事官、秋田県書記官、青森県書記官等を歴任。
⑤	小幡三郎 法学士	(??.)。明治26年帝国大学法科大学政治科卒、大蔵省（明治39・8・2煙草専売局事務官補）。
⑥	森正隆 法学士	(1866-1921)。慶応1・11・23（1866・1・9）生、米沢藩士・遠藤莊左右衛門の二男、森家を継ぐ、明治26年帝国大学法科大学法律学科参考科第2部〔仏法科〕卒、勝本勘三郎と同期、卒業後は内務省に入省、茨城県・秋田県・新潟県・宮城県・滋賀県の知事を歴任し、大正10年貴族院議員勅選、大正10・10・28没。
⑦	下平泰三 法学士	(??.)。後に忠良と改名、明治26年帝国大学法科大学政治科卒、内閣恩給局審査官、米沢興譲館中学第7代校長。
⑧	江村忠之助 法学士	(1968-?)。江村忠一郎の長男、明治27年帝国大学法科大学法律学科英吉利法兼修卒、後記⑨小林源蔵のほか岡松参太郎・春木一郎・志田鉦太郎・和仁貞吉らと同期、検事から実業界に転じ、加島銀行取締役。著書に中島行一（著）・江村忠之助（校訂）『漁業法通解』（水産同志会、明治34年）。
⑨	小林源蔵 法学士	(1867-1921)。慶応3・3・6（1867・4・10）米沢城下・秋山家の二男に生まれ、直峯町・小林家の養子となる。明治27年帝国大学法科大学卒業後は逓信省鉄道書記課に出仕、明治38年鉄道院理事から、明治45年山形県選出衆議院議員、大正10・1・9没。
⑩	浅見倫太郎 法学士	(1969-1943)。明治1・12・10（1869・1・10）生、米沢藩士・浅見省吾の長男、司法省法学校正則科第4期生から明治25年帝国大学法科大学法律学科参考科第2部〔仏法科〕卒、若槻礼次郎・安達峰一郎・岡村司・松岡義正・小川平吉と同期、明治42年朝鮮高等法院判事、朝鮮法制史の開拓者、大正10年法学博士。
⑪	南雲庄之助 法学士	(??.)。明治29年帝国大学法科大学法律学科英吉利法兼修卒、後記⑫黒金泰義と同期、卒業後は東京で弁護士を開業。
⑫	黒金泰義 法学士	(1867-1941)。米沢藩士・黒金泰乗の長男、慶応3・7・13（1867・8・12）生。明治29年帝国大学法科大学英法科卒業後は内務省に入省し、群馬県・大分県・山口県の知事、内閣拓殖局長等を務めた後、大正9年山形県第2区選出衆議院議員、昭和16・3・24没。

⑬	宇佐美勝夫 法学士	(1869-1942)。明治2・5・12(1869・6・21)生、米沢藩士・宇佐美章作の二男、幼名は大助、松岬学校から統合校の興譲小学校設立により、同校から米沢中学校を経て、第一高等中学校入学（このとき勝夫に改名）、明治29年帝国大学法科大学政治科卒、卒業後は内務省社寺局に入省、その後は富山県知事等を経て、大正10年東京府知事となり、関東大震災に遭う、昭和9年貴族院議員勅選。先妻は池田成章の三女芳子、後妻は四女光子。昭和17・12・26没。
⑭	北条元篤 法学士	(?!?)。明治30年帝国大学法科大学法律学科英吉利法兼修卒、後記⑮登坂小三郎のほか寛克彦・加藤正治らと同期、判事、訳書に北条元篤＝熊谷直太（訳補）『国際公法』（博文館、明治32年）があるほか、日本法律学校（現・日本大学）の講義録がある。
⑮	登坂小三郎 法学士	(1871-?)。片山仁一郎の三男、登坂照四郎の養子となり、明治30年帝国大学法科大学卒、鉄道省入省、鉄道院理事から昭和6年相模鉄道社長となるも9か月で退任。
⑯	保科孝一 文学士	(1872-1955)。明治5・9・20(1872・10・22)生、一高から明治30年帝国大学文科大学卒、東京帝国大学教授、退官後は東京高等師範学校教授、東京文理科大学教授、国語学者、文学博士、自伝に保科孝一『ある国語学者の回想』（朝日新聞社、昭和27年）、昭和30・7・2没。
⑰	水野廉平 医学士	(?!?)。明治19年帝国大学医科大学卒、卒業後は米沢に戻り医院を開業。
⑱	伊東祐彦 医学士	(1865-1936)。慶応1・8・17(1865・9・24)生、米沢藩医・伊東祐順（ボンベ門下・維新後は軍医）の長男、二男は伊東忠太（後出⑳）、明治25年帝国大学医科大学卒業後は母校の小児科で研究、明治28年県立福岡病院小児科部長に就任。明治34年欧州留学、ドイツ・フランスで2年間研究の後、明治37年京都帝国大学福岡医科大学（現・九州大学医学部）教授、明治39年医学博士、明治44年福岡医科大附属病院長、大正2年九州帝大医科大学長、昭和2年に退官後は、翌昭和3年新設の九州医学専門学校（現・久留米大学）校長兼附属病院長に就任、昭和11・10・3没。
⑲	鳥山南寿次郎 医学士	(1871-1926)。旧姓は小田切、小田切万寿之助（横浜正金銀行理事）の弟、小田切延寿（海軍機関中佐）の兄、鳥山家を継ぐ。東京外国語学校、第一高等中学校、明治30年東京帝国大学医科大学卒、大正元年宮内省侍医、大正15・8・25没、米沢有為会（明治22・11・23創立）の6人の創設メンバー（伊東忠太・村井三雄造・内村達次郎・鳥山南寿次郎・長谷部源次郎・宮島幹之助）の1人。
㉑	高橋秀松 製菓士	前出Ⅳ⑦

②①	大高英助 理学士	(1865-1937)。米沢藩士の子として慶応1・8・10(1865・9・29)生、明治27年帝国大学理科大学物理学科卒、明治41年より福井中学校長を24年間務め、柔道の指導に力を注いだ、昭和12・6・29没。
②②	佐藤通 工学士	(??)。明治14年工部大学校鉱山学科卒、卒業論文「捲揚機械ト関係セル機械装置」。
②③	五十嵐秀助 工学士	(1859-1933)。安政5・12・22(1859・1・25)生、徳間久三郎の三男、米沢藩士・五十嵐正知の養子となる、明治15年工部大学校電気工学科卒、卒業後は工部省に出仕、明治20年東京電気学校(現・東京電気大学)教授、32年工学博士、東京・横浜の電話交換局拡張の立役者、昭和8・2・11没。
②④	鈴木千代吉 工学士	(??)。上杉謙信以来の米沢藩の重臣・甘粕家(侍組侍)甘粕継成の二男、明治19年帝国大学工科大学機械工学科卒、明治22年米沢中学校第2代校長。
②⑤	香坂秀太郎 工学士	(??)。明治15年工部大学校機械工学科卒。
②⑥	伊東忠太 工学士	(1867-1954)。慶応3・10・26(1867・11・21)生、米沢藩医・伊東祐順の二男、長男は伊東祐彦(前出⑱)、東京外国語学校、第一高等学校から、明治25年帝国大学工科大学建築学科卒、明治26年東京美術学校講師、明治27年(architecture)の訳語につきそれまでの「造家」を「建築」とすべき旨を提唱、明治32年東京帝大工科大学助教授、明治34年工学博士、明治38年教授、大正2年水戸徳川家所蔵「祇園精舎図」がアンコール・ワットの実測図であることを解明、主な作品に昭和2年東京商科大学(現・一橋大学)兼松講堂、同年大倉集古館、昭和9年築地本願寺など、日本建築学の開祖として、昭和18年湯川秀樹・徳富蘇峰・三宅雪嶺とともに文化勲章受章、昭和29年米沢市名誉市民、昭和29・4・7没。
②⑦	南斉孝吉 工学士	(1867-?)。慶応3・4・17(1867・5・8)生、実家は佐藤家、明治27年帝国大学工科大学土木工学科卒、内務技師、大正6・11・14退官。
②⑧	青木勇 工学士	(1874-?)。青木友徳の長男、明治7・1・24生、明治29年帝国大学工科大学土木工学科卒、鉄道省入省。
②⑨	橋爪誠義 工学士	(1869-1912)。明治2・9・19(1869・10・11)生、明治29年帝国大学工科大学土木工学科卒、山梨県技師、明治45・2・4病没。
③⑩	佐藤四郎太 農学士〔林学士〕	(??)。明治29年農科大学林学科卒、卒業論文「林産物市場論」。
③⑪	石塚鉄平 農学士	(??)。明治29年農科大学農芸化学科卒、農商務省入省、農事試験場技師、新潟県加茂農林学校長、著書に石塚鉄平=後藤寛助『家畜の飼料とかひかた』(嵩山堂、大正2年)。

③②	山崎新太郎 米国文学士	(1861-1905)。明治14年慶応義塾本科卒業後、米沢中学校教頭となるが、20年渡米、25年帰国後は高等師範学校授業嘱託等を経て、33年愛知県第四中学校長。
③③	佐藤毅 米国文学士	(1869-1923)。旧米沢藩士・佐藤惟一郎の子、明治19年渡米しパシフィック大学・カリフォルニア大学卒業、帰国後は高等商業学校教授から、東京海上保険副支配人等の保険業を経て、大正6年東洋商会無限責任社員となり貿易業に従事、著書に佐藤毅『日本人の誤り易き英語中学教科書』（富の日本社、明治43年）。
③④	大瀧八郎 米国文学士	(?-)。千葉県尋常中学校教諭?中国・青島副税関長?
Ⅶ 金鷄勲章		
①	大熊淳一 功4級	前出Ⅳ⑥
②	黒井梯次郎 功5級	前出Ⅳ⑨
③	釜屋忠道 功5級	前出Ⅳ⑱
④	千坂智次郎 功5級	(1868-1936)。千坂高雅（前出Ⅰ③）の二男、慶応4・2・15（1868・3・8）生、米沢中学から攻玉社を経て海兵14期（明治20年卒）、大正6年海軍中將、海軍兵学校長、昭和11・2・23没。
⑤	山崎金一 功5級	前出Ⅳ⑳
⑥	千歳勝之助 功7級	(?-)。不明。
⑦	古藤寛蔵 功7級	(?-1905)。陸軍歩兵少尉、日露戦争にて戦死。東京朝日新聞明治38・6・27朝刊7面死亡広告。
⑧	大石力彌 功7級	(?-)。不明。
Ⅷ 実業家		
①	八木朋直 銀行業	(1841-1929)。米沢藩下級藩士・金子文弥の二男、同じく下級藩士の八木長七の養子となる。明治2年越後府租税会計方、明治7年新潟県会計課長、明治9年第四銀行頭取（第2代）、新潟市会議長から、明治32年新潟市長（第3代）。
②	吾妻健三郎 印刷業	(1856-1912)。米沢藩外様外科医・吾妻寿庵の三男、日本画を石版印刷する技術を開発、内務書地理局の地図作成の功勞者、東京神田駿河台袋町東洋堂主人、大正1・10・26没。

## (ア) 旧藩主

【68】 もっとも、「貴族院議員」の筆頭に掲げられている旧藩主・上杉茂憲は別格で、米沢の過半を占める士族（上杉家臣団）にしてみれば、明治以降も依然として「主君」である。なお、我妻栄の長男・洋によれば、父・栄は、米沢の上杉家について、次のような話をしたことがあるという。

石神井の家の庭に植木屋が何人も入って、植木の手入れをしていたある日、「俺はあのハサミの音を聞いていると、何ともいえぬ満足感をおぼえるんだ」と、小学生の私にいったことがある。「米沢の上杉様のお屋敷などで、よくあのハサミの音がしていた。“あれは金持の屋敷にしか響かぬ音だ。将来自分の屋敷にも、あのハサミの音を響かせたい”子供の頃、俺はよくそう思ったものだ」と。

我妻の「立身出世主義」の世俗的な側面が垣間見えるエピソードであるが、ここで我妻の「石神井の家」についても触れておくと、我妻の二男・堯は、次のように述べている。

結婚〔大正15・3・7〕後は米沢の生活から西欧化に非常に憧れていたという父の生活がその方向にどんどんエスカレートしていったのではないかと思われるふしがたくさんございます。例えば、私が生まれたのは石神井の家なのですが、これは昭和3年ごろ石神井に土地を買い家を建てました。今は石神井と申しますと東京の中でもかなり都心に近い住宅地ですが、その当時は眼の前が全部田んぼでございまして、どちら側の親戚か分かりませんが、親戚から我妻は気が違ったのではないかと言われた位、不便な所でございました。<sup>(56)</sup>そこへ建てた家に祖父と祖母が米沢から引き取られてきたわけですが、その済む所は日本間三つです、八畳と六畳と四畳半の三間

(56) 我妻洋・前掲注(32)409頁……〔所収・改題〕前掲注(32)241-242頁。

(57) 我妻堯・前掲注(38)270-271頁……〔再録〕前掲注(38)152-153頁。

(58) 〔七戸注〕当時の地番は北豊島郡石神井村大字田中宇上長光寺1071番の1、大正10年に東京市小石川区指ヶ谷町87番地・松南千秋(旧鳥取藩士族・松南宏雅の長男、明治9年7月生、質業(松南合名会社)を営む資産家の大地主で高額納税者)が取得し、昭和4年1月29日付で北豊島区高田町巣鴨3559番地・我妻栄に所有権移転登記が經由され、同年10月3日に住所変更登記がされている(完成した新居への入居によるもの)。その後の地番は、昭和9年東京市板橋区石神井南田中町から、昭和22年板橋区から練馬区が独立して練馬区南田中町、昭和45年現在の練馬区石神井町一丁目となる。地目は現在に至るまで山林。

我妻洋＝唄孝一・前掲I注(3)15頁によれば、「家の南面は水田、西は松林、北は畑、近くに数軒の人家が散在するだけで石神井駅前で乗る人力車も途中で降り、あとは小川沿いの畔道を歩いて帰宅する状態が暫く続いた」という。

の日本間ですが、母屋のほうは全部西洋館でございます。お手伝いさんの部屋だけ畳の部屋で、あとは全部西洋館で、私も子どものころから、ベッドに寝かされております。昭和の初期にそういう西洋館を、しかも自分で——本屋さんから金を借りたんだそうですが——建てたというのもかなり思い切った話でございます。その家を設計したのは母らしいんです。そのへんから父は母の趣味に全面的かどうかは知りませんが、また話し合いをしたんだらうとは思いますが、かなり母がやりたいことに自分も同意してついていくという生活をしていたのではないかという感じがいたします。

我妻栄の「人と学問」の形成にとって、妻・緑が果たした役割には多大なものがあるが、まずは我妻の郷里・米沢と生家・我妻家に話集中させよう。

### （イ） 藩医の子弟

【69】 明治初年の第1期立身出世主義（【52】①）の人物は、戊辰戦争で活躍した士族の子弟のほか、西周・森鷗外・梅謙次郎のような藩医の家系や、木下広次・岡松参太郎・高橋作衛のような藩儒の家系といった、江戸期における知識階級の子弟が多いが、米沢においては、幕末から維新にかけて、とくに藩医の子弟に対し、特別な英学教育が行われた点に特色がある。

事の発端は、米沢藩が、戊辰戦争のため病院を造営する際に、洋学所を併設して最新の西洋医学を修得した医師の育成を図ろうとしたことに始まる<sup>(60)</sup>。講師には、幕府の医学所で英学を教えていた渡辺洪基が、かつて医学所に学んで渡辺と知己の榎村清徳（【67】図表V①）の仲介で、明治元年8月に米沢に招かれた。

渡辺は翌明治2年1月末に江戸に戻ってしまうが、その後は榎村が仮塾長となっ

(59) 〔七戸注〕田中誠二『商事法と共に六十年——その回顧と展望』（経済法令研究会、昭和57年）によれば、我妻や田中が留学した頃は（我妻の留学は大正12～14年、田中の留学は昭和2～5年）「出版社が、これは著者として役に立つだろうという人には、無利子、無担保、無期限で金を貸してくれたのです」（106頁）、「我妻栄君が留学のときに岩波書店から多額の前借をしたというのは有名なのですが、いくらかそれにならって、鳩山〔秀夫〕先生が口をきいてくれて、有斐閣から借りて行きました」（107頁）。我妻が、昭和5年5月『民法総則』（石神井の家を建てた翌年の刊行）や、昭和7年11月以降の『民法講義』シリーズを岩波書店から刊行していることよりすれば、我妻の石神井の家の建築資金の借入先も、おそらく岩波書店だったろう。

(60) 詳細は、松野良寅『病院日記3について』『戊辰戦役関係資料（米沢市史資料第5号）』（米沢市史編さん委員会、昭和56年）159頁。なお、米沢藩における藩医の歴史に関しては、新野辰三郎ほか（編）『米沢医界のあゆみ（米沢市医師会館創立満四十周年記念発行）』（米沢歯科医師会、昭和38年）、医史編纂委員会（編）『続・米沢医界のあゆみ』（米沢市医師会、平成16年）、北条元一『米沢藩医史私撰』（米沢市医師会、平成4年）。

て、上等生徒 7 名——①内村良蔵（洋庵。藩医・内村慶玄の子、文部官僚となる）・②平田東助（道策。藩医・伊東昇迪の二男。<sup>(61)</sup>【67】図表 I ②）・③柏原求越・④有壁玄真・⑤堀内亮之輔（忠迪。陸軍軍医）・⑥草刈義哉（道倫。【67】図表 IV ②）・⑦海瀬敏行（俊益。【67】図表 IV ⑨）を指導し、一方、上等生徒は、各 1～2 名の下等生徒——①三瀧謙三（藩医・三瀧白圭〔玄寿〕の長男。三瀧信三〔9〕④の父、明治 9 年東京医学学校卒、芝警視病院長）・②高橋秀松（玄迪。三瀧白圭の二男、上記①三瀧謙三の弟、【67】図表 IV ⑦）・③曾根俊虎（藩儒・曾根敬一郎の子、海軍大尉、興亜会（後の東亜同文会）の設立者）・④保科由良之助・⑤小野周安・⑥猿橋吉太郎・⑦木村宮之助の指導を分担する体制がとられた。

その後、内村良蔵・平田東助・曾根俊虎のほか甘粕竹太郎（篤郎。米沢藩重臣・甘糟継成の長男）は、東京・麻布の上杉邸で吉田賢輔から英学指導を受け、このうちの内村・平田の 2 人は、明治 2 年 8 月大学南校に進んだ。一方、米沢洋学所仮塾長の榎村清徳は、三瀧謙三とともに、東京・上杉邸での予備指導を経由することなく、大学東校に入学する。

#### （ウ） 武官

【70】 明治 30 年『市民必携米沢通覧』に掲記されている大尉以上の武官 27 人の内訳は、陸軍 12 名、海軍 15 名であり、まだ、この時代は、後に「米沢の海軍」と呼ばれるほど海軍には傾斜していない。

#### （エ） 博士・学士

【71】 明治 30 年『市民必携米沢通覧』掲載の「博士」「学士」のうち、博士は、すで見たと（イ）藩医の子弟である榎村清徳と平田東助の 2 人。

学士は、法学士が 15 名と最も多く、次いで工学士 8 名、医学士 3 名（ほか薬剤〔製薬〕士 1 名）、農学士 2 名（うち 1 名は林学士）、理学士 1 名、文学士 1 名のほか、アメリカで文学士を取得した者 3 名が挙げられている。<sup>(62)</sup>

(61) 一方、東助の兄（伊東昇迪の長男）伊東祐順は、長崎・精得館でボンベとボードウィンに学び、維新後は陸軍軍医として西南戦争や日清戦争に従軍。退役後は米沢に帰って開業医となるが、『市民必携米沢通覧』前掲注（48）65 頁以下「所得税高納税者（明治 29 年度）」によれば、上杉茂憲に次いで米沢 2 位の高納税者である（上杉茂憲の所得は 2 万 6420 円、伊東祐順の所得は 3683 円）。

(62) なお、これより 7 年前の明治 23 年の数字に関して、表渡部恵吉 = 青木昭博（解説）『米沢製糸場関係史料・明治前期行政資料（米沢市史編集資料 20 号）』（米沢市史編さん委員会、昭和 62 年）

### （オ） 第2期立身出世主義世代のドロップアウト組

【72】 以上見てきたように、旧藩主・上杉茂憲を除く「貴族院議員」ならびに「勅任官」および「博士」は、すでに功成り名を遂げた第1期立身出世主義（【52】①）世代であるが、これに対して、「武官」「学士」の項に掲げられている人物の多くは、第2期立身出世主義（【52】②）世代であり、彼らが活躍するのは日露戦争（明治37～38年）の頃であって、要するに彼らは、司馬遼太郎『坂の上の雲』の主人公——秋山好古・真之兄弟や正岡子規や夏目漱石らと同世代の人物である。

一方、彼らは、本稿の主人公との関係でいえば、我妻栄・岸信介ら一高・東大の同級生の父親世代に当たる（我妻栄の父・我妻又次郎は、子規や漱石より1歳年上の慶応2年（1866年）生まれ、岸信介の父・佐藤秀助に関しては、平岡梓の父・平岡定太郎と同じ文久3年（1863年）生まれとする資料と、慶応元年（1865年）生まれとする資料がある。一方、金田一他人の父・金田一久米之助は——他人は久米之助の数え42歳の子なので——10歳ほど年長の安政2年（1855年）生まれである）。

だが、我妻らの父親のうち、立身出世を遂げたのは、平岡定太郎のみで、我妻の父・又三郎は、正規の学歴ルートに乗ることができず、岸の父・佐藤秀助は、学問で身を立てようとするも果たせず、また、金田一の父・久米之助は、農家からの入り婚のため高等教育を受ける機会もなく、和算家としても名高い本家の惣領・金田一勝定に頭が上がらなかった。

もっとも、親が成功者であるか否かは、結論的には差異をもたらさない。というのは、不成功者が、自らが果たせなかった夢を子に託すのと同様、成功者もまた、自らの成功体験に基づいて、子に同じ道を歩ませようとするからである（平岡定太郎・平岡梓や、あるいは我妻栄がそうであるように）。

### （3） 封建的・保守的な身分関係

【73】 封建的・保守的な身分関係は、立身出世主義と同様、この時代の日本社会全般・日本全国に当てはまる事柄ではある。

---

「山形県米沢市政表（山形県米沢市役所、明治23年4月調製）」252頁は、工学士3名、法学士2名、医学士1名、農学士1名、文学士1名としている。なお、軍属に関する数字は、仕官58名、陸軍士官学校生徒2名、海軍兵学校生徒3名である（258頁）。

## ア 女性の地位

【74】 女性の地位に関しては、我妻の言葉を引用しよう。<sup>(63)</sup>

私は東北の米沢の生まれであります。ここは非常に封建的な気分の強いところでありまして、男尊女卑の気持もなお相当にはげしい。しかし、なにも米沢にかぎらず東北一般、あるいは九州のほうなんかにも、そういうところが相当多いということですから、諸君も郷里のことをお考えになれば、思いあたることがないでもないでしょう。私の郷里では……と申しましても、私が育った頃ですから、もう30年も前のことではありますが……お客さんの前でさかんに女房を叱る。「おい、早くお茶を持ってこい、何しているんだ！」とどなりつける。するとお客さんのほうでもキマリがわるくなるので、「お宅の奥さんはたいしたものです。うちのオタフクときたひには……。」(笑声)客の前で女房を叱ることが、客に対する礼儀だと心得ているらしい。その中には、人の前で自分の女房をほめるなどということは、はなはだよろしくないことだ、鼻の下が長い、(笑声) そういう気持がある。心になくても、人の前では女房を叱る、女房はけなす、そうした気持があるのではなかろうかと推測されます。

ところが、我妻に関していえば、男尊女卑の発想がまったく認められない。その理由は、二男・堯も推測しているように、母・つるへの敬慕の情が強かったことと、姉(2人)妹(2人)との仲が非常によかったことが影響しているのだらう。<sup>(64)</sup><sup>(65)</sup>

(63) 我妻栄「家庭生活の民主化」『法律における理屈と人情』(日本評論社、昭和30年)72-73頁、『同(第2版)』(日本評論社、昭和62年)65頁……〔所収〕『民法研究X講演』(有斐閣、昭和46年)45-46頁。

(64) 我妻堯・前掲注(38)252-254頁……〔再録〕前掲注(38)140-141頁「男一人で非常に大事にされて育つと『男尊女卑』の考え方になってもいいはずですが、そうではなくこれが私にとって非常に不思議に思えることがあります。……。イエの民主化と女性の地位の向上ということに父は戦後にかなり力を注いだようでございます。それが父の若い時から女姉妹にかこまれて育った生い立とどこで結びつくかというのが、いま私にはちょっとわからないのでございます。女性の中で大事に育てられれば、ことに米沢は九州ほどではないと思いますけれども、やはりその時代にはかなり男尊女卑の考えというものがあったのではないかと思うんです。ただそこで思いあたりますのは、母、私からみれば祖母でございますね、父の母、おつるおばあさんと家では父はよく呼んでおりましたけれども、母の影響がかなり大きかったのではないかと思います。……女性の地位を向上させることに努力したのは、家において自分だけが大事にされたのに、姉妹や母の地位はあまり高くなかったことをみて、将来それをなんとかしたいと考えていたのか、……」。

(65) 我妻と対照的な事例として、たとえば今村力三郎(1866-1954)「(長男、二三四男物がたり)一人息子に生れた悲哀——二人の姉はあるけれど女は真味の相談相手にはならぬ」中学世界21巻2号(大正7年)82頁は、次のようにいう。「私は一人息子に生れたが、他に二人の姉がいる。

【75】一方、夫婦関係の平等・対等に関して、最も影響を及ぼしているのは、やはり妻・緑のようで、二男・堯は、「母親が私の父の人生に与えた影響というのも非常に大きなものがある」という<sup>(66)</sup>。周囲の人間は、我妻の妻に対する態度に、かなり戸惑ったらしく、「たとえば奥様をお呼びになるにも緑さーん!とか、奥様!!とか、普通誰れでもいうオーイなんて一度もおっしゃったことはないと思います」<sup>(67)</sup>、「よく先生が屋敷中にひびき帰るような大きな声で『みどりさん』と呼ばれるのを珍しい感じで聞いておりました」<sup>(68)</sup>などと書き記している。

もっとも、岸信介・良子夫婦も、お互いを「のぶさん」「よし子さん」と呼び合っていた<sup>(69)</sup>。これは、2人が従兄妹どうしの結婚であり、幼い頃からの呼び方がそのまま引き継がれたためであるが、中学3年で岸家に養子に入った信介は、一高2年の時から良子と暮らしており、大学入学以降岸と親しくなった我妻は、「のぶさん」「よし子さん」と呼び合う関係を、間近に見ていたことだろう。

### イ 親子関係

【76】これに対して、親子関係については、長男・洋との間の感情の行き違いもあって、評価が難しい。洋は、父・栄に対する追悼文で、次のような屈折した感情を吐露している<sup>(70)</sup>。

「夫婦の財産」という講演（『図書』1973年12月号<sup>(71)</sup>）の中で、父は私を例にひき「長男が去年の春に小さな家屋を買ったんです。かけ出しの大学の教授が家屋を買えるというのはたいへんなことで……」と話している。石神井の父の家とほぼ同じ大きさの家を「小さな家屋」といったのは、日本的謙遜だったとしても（父にはこの家を見てもらえなかった）、「かけ出しの大学教授」は受取りかねる。かけ出しの助教授という

---

二人とも飯田〔現：長野県飯田市。今村（旧姓・蜂谷）の実家〕に在るが、女は何事に依らず親身の相談相手にならぬ。悲喜を共にする事すら如何〔どう〕も薄い。男と女が共鳴する点が妙な事がこゝでも発見される」（83頁）。

(66) 我妻堯・前掲注(38) 267頁……〔再録〕前掲注(38) 150頁。

(67) 横田広子「コンメンタルのお宿」『追想の我妻栄』前掲I注(63) 152頁。

(68) 加納嘉徳「長考の暮」『追想の我妻栄』前掲I注(63) 190頁。

(69) 工藤美代子『絢爛たる悪運——岸信介伝（幻冬舎、平成24年）11頁。

(70) 我妻洋・前掲注(3) 76頁。

(71) 〔七戸注〕292号2頁以下……〔所収〕我妻栄『民法研究XII補巻2』（有斐閣、平成13年）159頁。我妻栄が死去（昭和48年10月21日）の12日前の10月9日に名古屋市・愛知文化講堂で行った岩波書店創業60周年記念講演で、これが我妻の生前最後の講演となった。

日本語はあるけれど、かけ出しの教授は妙だし、私が助教授、准教授を経て教授になってから5年以上になるから、「かけ出し」はひどい。こんな抗議をするのは子供じみた話だが、抗議をしたいのも本音なのだ。

しかし、この夏〔アメリカから〕帰っても父はもういない。折角息子がいいニュースを持って帰るのに、抗議を申込むつもりでいるのに、断わりもなしにさっさと死んでしまって、随分ひどいと思う。私は今まで父を恨んだり、その言動を本気で「ひどい」と思ったことはない。だが、今度だけはひどいと思う。夜半や明け方にふと父を思い、「ひどい、ひどい」と心につぶやきながら、私は今も独りで涙を流す。

我妻は、自分の妻を「うちのオタフク」呼ばわりはしないし「愚妻」扱いもしない。だが、長男・洋に対して、彼は——さほどの意識もないまま「日本的謙遜」をもって——「愚息」扱いをする。

洋の妻・令子は、「父と子の間に時には生じやすい、なれ合いのような甘さを、わが子には許さなかった義父。しかし、偉い父親に育てられた子の気持、父親の重みにつぶされまいとあがきつづけたこの気持が、義父には、はたしてわかっていたらどうか」と嘆ずるが、<sup>(72)</sup> 栄の長男に対する扱いが、およそ日本の地方一般に存在する封建的・家父長的・父権主義的な家族観の影響を受けているのかは、必ずしも明らかではない。

## 2 家庭

【77】 上記のような我妻栄の人格形成には、東北あるいは米沢といった地域的な環境もさりながら、生まれ育った家庭環境が、多大な影響を及ぼしている。

我妻栄は、我妻又次郎・つる夫婦の間に生まれた5人の子供のちょうど真ん中（3番目の子供）で、上2人も、下2人も女子——つまり、我妻家で唯一の男子・跡取り息子であった。

5人の子供の名前は、上から「もとゑ〔元枝〕」「ちよ〔千代子〕」「栄」「うめ〔梅子〕」「千枝〔千枝子〕」で、これらの名前の由来に関して、孫田秀春（又次郎の米沢中学の教え子で二女・千代子の夫＝栄の義兄。後記【94】参照）は、父・又次郎の父（栄の父

---

(72) 我妻令子「ヤンマのシッポ」『追想の我妻栄』前掲I注(63)419頁。

方の祖父）遠藤駒蔵が詠んだ『千代までも栄ゆる梅の元枝かな』というお目出たい俳句から取ったのだと聞いている。しかし当時はまだ三女の梅子はまだ生まれてはいなかった<sup>(73)</sup>と述べている。

孫田は、明治33年米沢中学に入学してから2年間我妻家に寄宿していた。一方、三女のうめが生まれるのは、孫田が中学3年になって寄宿舎に入る直前の明治35年3月11日なので、実際のところは、彼女が生まれて「うめ」と名づけられた後に、祖父・遠藤駒蔵が我妻家に入った二男・又次郎の一家繁栄を言祝いで詠んだ句を聞いた孫田の記憶違いと考えるのが自然であろう（もちろん、そうであったとしても、駒蔵が孫たちの名前をつけた可能性は否定されないが）。

### （1）父・又次郎

#### ア 祖父・遠藤駒蔵

【78】父・又次郎の実家である遠藤家は、我妻によれば「上杉15万石の足軽の家」とされる。一方、孫田秀春は、又次郎の父（我妻の父方の祖父）遠藤駒蔵について、次のように語っている<sup>(74)</sup>。

元来我妻家というのは平民だが、父の方は上杉家の士族で、このお爺さんは子供の時分から上杉の殿様の御小姓をつとめた人であったという。当時まだ生きて居られて、私も度々お目にかかったが気品があり威厳があり普通人とはどこか違ったものをもっておられたように思えた。俳句をよくし又俳画も時々ものしておられた。

松野良寅（編）『我妻栄——人と時代』掲載の遠藤家の略系譜によれば、栄の祖父・駒蔵は、林徳兵衛の二男として天保11年12月25日（1841年1月17日）に生まれ、遠藤理作の養子となって遠藤家を継いだとされる（なお、駒蔵の妻・よそは、安藤次左衛門の長女とあるから、婿養子ではない）。

【79】遠藤駒蔵・よそ夫婦の間には、4人の男子が生まれた。①長男・茂作は、我妻栄の父・又次郎より5歳年上の文久元年8月20日（1861・9・24）生まれ、②栄

(73) 孫田秀春『私の一生』（高文堂出版社、昭和49年8月25日発行）53頁。なお、2か月後に刊行の孫田秀春「千代子と栄と私の貧乏物語」「追想の我妻栄」前掲I注（63）3頁も、ほぼ同文。

(74) 我妻栄「（身辺雑記）検定試験」ジュリスト306号（昭和39年）31頁……〔所収〕『民法と五十年——身辺雑記（4）』前掲I注（115）22頁。

(75) 孫田秀春『私の一生』前掲注（73）52-53頁、「千代子と栄と私の貧乏物語」前掲注（73）3-4頁。

(76) 『我妻栄——人と時代』前掲注（32）72頁。

の父・又次郎は二男で、慶応2年10月28日（1866・12・4）生まれ、③三男・三作は、又次郎より4歳年下の明治2年12月17日（1870・1・29）生まれ、④末の弟（四男）鼎四郎は、又次郎より8歳年下の明治7（1874）年6月4日生まれで、三男・四男の出生地は調査できていないが、長男・二男と同じく米沢城下・北寺町西ノ町の遠藤駒藏・よそ夫婦の家だろう。

以上の4人の男児のうち、長男以外はすべて養子に出されているが（もっとも、二男以下を軍人の道に進ませ、あるいは養子に出すのは、この時代には普通に見られる事柄であった）、子供たちの学歴・職歴から判断するに、非常に教育熱心な家庭だったようであり、激動の幕末維新时期をくぐり抜けた祖父・駒藏もまた、子・又次郎、孫・栄と同様、「立身出世主義」の人だったのだろう。

#### イ 遠藤駒藏長男・遠藤茂作

【80】 遠藤駒藏の長男（栄の伯父）遠藤茂作は、県内の小学校の校長を歴任した人物である。なお、小学校の教員資格についても、弟・又次郎の中学校教員資格と同様、検定試験（【82】参照）によって取得することもできたが、当時の校長職の一般的なキャリアパスからすれば、弟・又次郎と異なり、おそらくは山形県師範学校か、あるいは県外の師範学校で正規の教育を受けたのだろう。

明治34年から39年まで西置賜郡の荒砥尋常高等小学校（現・白鷹町立荒砥小学校）校長を務めた後、同郡の長井尋常高等小学校（現・長井市立長井小学校）校長に転じて明治41年まで在任した。嗣子に恵まれず、末弟（遠藤駒藏四男）鼎四郎の子（四男）雄三が養子となって遠藤家を継いでいる。

ところで、「我妻栄先生は伯父遠藤茂作元校長先生を敬慕しておられ、伯父さんの勤務先であった荒砥小学校を度々訪問された。緑夫人も父親〔鈴木米次郎〕が当時荒砥小学校で新進音楽家として公演されたという共通の思い出を持っておられた」ことから、「我妻栄氏と緑夫人は結婚に当りこの伯父に心配になったことを忘

(77) 当時の小学校長の一般的なキャリアパスに関しては、元兼正浩「明治期における小学校長の法的地位の変遷に関する一考察」教育経営教育行政学研究紀要1号（平成6年）37頁、元兼正浩「明治後期における『優良』小学校長の履歴」教育経営教育行政学研究紀要2号（平成7年）51頁、斉藤太郎「明治三十年代小学校長論に関する覚え書き」桜花学園大学人文学部研究紀要10号（平成10年）190頁参照。

(78) 「思い出の1枚」我妻栄記念館だより8号（平成18年）1頁。

れられず、伯父の勤めた荒砥小学校を訪ねて下さった」という<sup>(79)</sup>。

こうした後日談からは、我妻栄と鈴木緑の結婚に関して、米沢では何らかの障害があったようにも推測されるが、我妻の結婚問題については、成富信夫の回想の中にも、米沢関係で少々気になる記述がある<sup>(80)</sup>。

大学を卒業して我妻君は大学に残り、岸君は農商務省に入った。私も農商務省に入った一人である。我妻君はやがて大学から欧州に留学に出かけた。或る時、米沢出身の大実業家が私を呼んで自分の娘を留学中の我妻に嫁入りさせたいと思うから問合せてみてほしいとのことであった。私は早速その問合せの手紙を送ったところ我妻君から丁重な返事が来た。今は留学中で嫁の話は何れ帰朝の上にするから一応お断りしておいてほしいという趣旨であった。私はそれを実業家にお取次ぎした。我妻君が帰朝した後、郷里出身者の会合でその実業家にお目にかかったので、ご挨拶したところ極めて冷たい態度であったよと私に笑いながら報告されたことがあった。

我妻栄が、東洋音楽学校（現・東京音楽大学）創設者・鈴木米次郎の末娘・緑と出会うのは、大正14年末に日本に帰朝する船上であり、師・鳩山秀夫が「我妻はインド洋でコイを釣った」と茶化した話は有名であるが、結婚は出会ってからわずか5か月後の翌大正15年3月7日であって、非常に性急な感じがする。その間の経緯について、長男・洋の妻・令子は、次のように述べている<sup>(81)</sup>。

栄は東大で鳩山秀夫教授の弟子であったが、鳩山夫人の千代子が緑の実家の鈴木家と懇意なのを知って、千代子夫人に仲立ちをたのんだらしい。緑の父の米次郎は芸大の前身、東京音楽学校〔現・東京芸術大学音楽学部〕を卒業後は高等師範附属〔現・

(79) 新野豊松『我妻栄氏と荒砥』（芳文庫、平成7年）……〔再録〕「（あの日あの時——荒砥小学校訪問）我妻栄氏と荒砥・その2」我妻栄記念館だより8号（平成18年）2頁。なお、「同〔その1〕」我妻栄記念館だより7号（平成17年）3頁には、我妻から当時の校長に宛てた次のような文面の手紙が紹介されている。「大正15年の始め私が結婚しますとき伯父の遠藤茂作に東洋音楽学校長鈴木米次郎の三女〔四女。ただし三女は夭折〕緑と結婚する旨知らせましたところ、伯父からの返事に『鈴木米次郎という音楽家は記憶にある。昔荒砥小学校長の時新進音楽家というので招いて講演をしてもらった。その時鈴木氏は冬の仕度に興味をもち藁グツ藁マントを着用し、自分と2・3人の職員と記念の撮影をした。』」といって、その写真を探して送ってくれました。まぎれもなく妻の父です。それ以来妻の心に荒砥小学校という名前が刻まれました」。このほか、小林由紀子「白鷹町立荒砥小学校『我妻栄文庫』を訪問して」我妻栄記念館だより8号（平成18年）3頁も参照。

(80) 成富信夫・前掲注（16）135頁……〔所収・改題〕前掲注（16）34-35頁。

(81) 加藤恭子=我妻令子・前掲注（4）13-14頁。

筑波大学附属小学校・中学校」の音楽の教師となり、秀夫の兄で後に首相となる鳩山一郎を教えたこともあり、鳩山家とは親しかったのだ。<sup>(82)</sup>

そのうちに栄は鈴木家へあそびにくるようになり、結婚を申し込むのだが、縁は迷ったらしい。友だちに相談に行くと、

「会ってすぐに結婚を申し込むような人は、お止しなさい」

と忠告された。

「でも、ともかく家へつれていらっしゃい」

ということなので、栄をつれて行くと、

「あの方ならいいわ、大丈夫よ」

と友だちは保証してくれたそうである。

日本へ新しいタイプの音楽、オペラを紹介した父の米次郎は、2人の結婚を快く許してくれた。

令子の記述を信用すれば、「インド洋のコイ」は、我妻の一方的な片想いということになるが、我妻が結婚を急いだ理由は、成富信夫経由で持ち込まれ、帰朝後までペンディングにしていた「米沢出身の大実業家」の娘との縁談話と、無関係とも思われない。

ところで、我妻は、学生時代「さる金持の育英事業から金を貰って苦学した」といい、<sup>(83)</sup>「私は、結局、父母の慈愛と、ある篤志家の育英資金とによって大学を卒業することができました」と述べている。<sup>(84)</sup>一方、孫田秀春は、我妻の「一高入学後は育英資金の貸与先を世話してやり」と述べているから、<sup>(85)</sup>我妻に育英資金を提供した「さる金持」「ある篤志家」は、米沢関係者と推測されるが、その名前に関しては、娘を我妻に嫁がせようとした「米沢出身の大実業家」と同一人物かどうかも含めて、

(82) 〔引用者注〕なお、鳩山秀夫と、高等師範学校（明治35年より東京高等師範学校）附属小学校・中学校で同級だった穂積重遠もまた、鈴木米次郎と親しい関係にあり（前掲Ⅰ注（51）参照）、昭和5年には、鳩山一郎・赤司鷹一郎らと、関東大震災で焼失していた東洋音楽専門学校（明治44年東洋音楽学校から改称。なお、戦後の昭和29年東洋音楽短期大学から、昭和38年4年制の東洋音楽大学に改組、昭和44年現在の東京音楽大学に改称）の新校舎を建築・寄贈している。

(83) 我妻栄「大学入学の頃」緑会雑誌9号（昭和12年）21頁……〔所収〕『民法と五十年——身辺雑記（4）』前掲Ⅰ注（115）343頁。

(84) 我妻栄「（巻頭随想）『自頼奨学財団』の設立」ジュリスト361号（昭和42年）10頁……〔所収〕『民法と五十年——身辺雑記（4）』前掲Ⅰ注（115）376頁。

(85) 孫田秀春『私の一生』前掲注（73）55頁、「千代子と栄と私の貧乏物語」前掲注（73）7頁。

現時点までの調査の限りでは、まったく明らかにならない。大方のご教示を賜りたい。

ウ 父（遠藤駒蔵二男）遠藤〔→我妻〕又次郎

【81】 長男・茂作の5つ下の弟である又次郎は、すでに触れたように、正岡子規や夏目漱石と同年代の人間であり、同じ慶応2年生まれの人物を挙げれば、若槻礼次郎・今村力三郎・黒田清輝・内田嘉吉のほか、同じ米沢出身では芹沢孝太郎（帝國大学法科大学卒。【67】図表Ⅵ②）<sup>(86)</sup>がいる。

(ア) 「立身出世主義」の血筋

【82】 東堤小学校（明治5年設立）を明治12年に卒業した又次郎は、翌13年私立米沢中学校に進学、1年間は主として漢学・数学を学んだ後、15年からは宇佐美駿太郎（宇佐美勝夫（【67】図表Ⅵ③）の兄。第9代米沢市長）らに就いて英語を学ぶ。一人息子・栄によれば、「クラスの中では一番よく出来たそうです。そこを終わってから〔明治17年卒業〕、志を抱いて東京に出た。当時大学〔正確には第一高等中学校から東京大学〕に入るだけの金がないので、海軍兵学校を受けました<sup>(87)</sup>。これに合格していれば海兵9期（山下源太郎（【67】図表Ⅳ⑰）の1期上）のエリートとなっていただろうが、しかし、近眼のため不合格。息子・栄の言葉を続ければ——、<sup>(88)</sup>

志を得なくて、それから同志社大学に入ったり〔明治17年から1年間京都・同志社英語学校に学ぶ〕、あっちに入ったり、こっちに入ったりして〔明治18年より大阪の親愛学校で1年間英語教師（月給15円）を務める〕、岡山あたりに行って英語の先生をして〔岡山の英学研究会で2年間英語教師を務める〕、大変もてたらしいんです。いいつもりで青春を過ごしたらしいんです。〔その後も数校で英語を教えたが、〕病気をして、故郷が恋しくなって、郷里に帰って来る時に〔岡山から米沢に帰郷する途中に〕東京に出てみたら、自分より学問がずっと駄目だった人間が、東京大学〔この時

(86) なお、松野良寅「文化講演会（平成9年6月15日）米沢の精神風土と我妻栄先生」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲注（38）174頁以下「我妻又次郎の同時代人」も参照。

(87) 我妻栄「父と子・子と父」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲注（38）119頁……〔収録〕我妻栄『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』（有斐閣、昭和51年）197頁、松野良寅・前掲注（86）174頁。なお、又次郎の経歴に関しては、佐藤英夫「（あの日のあの時——没後32年に当って）又次郎先生のこと」我妻栄記念館だより7号（平成17年）2頁、『我妻栄——人と時代』前掲注（32）74頁以下も参照。

(88) 我妻栄・前掲注（87）120頁……〔収録〕前掲注（87）197-198頁。

には「帝国大学」に改組されている]を卒業して学士になっている。または海軍に入っ  
て前途洋々というところにいる。自分は何一つかなえられず、ただ英語が多少できる  
というだけで、愉快的青春を送ったかも知れないが、何一つ身につくものがないと寂  
しく思ったらしいのです。

そして、米沢に帰った父は、母の家にお婿さんに入ったのです。それから資格も何  
もありませんから、中学校の代用教師になって、そして苦心して検定試験を受けまし  
た。これは私の随筆に書いたんですが、<sup>(89)</sup>「検定試験」という言葉ぐらい、私の家庭に  
暗く重くのしかかっていたものはない。

父は検定試験を通るまで、検定試験を通るまでとって安月給で非常に苦勞しまし  
た。私は子供で検定試験というのはどんなものでどんな字を書くのかさえわからな  
かった時から、検定試験というものは、非常にいやな悪魔のようなものだと思って  
育ったんです。

そういう家庭で育ったものですから、そこで母は、親父の遂げ得なかった志を息子  
に遂げさせようと心秘かに考えたんです。恐らく親父の方も、自分はもう駄目だ、学  
士になる機会もなかったし、海軍の軍人にもなれなかった、自分は仕方がないが息子に  
自分の志を遂げさせようと考えたんでしょう。

しかし、母はそれを一言も私に言っておきません。ただわかるんです。母の生活で  
子供にわかるんです。そこで私は一意専心、学校の成績を良くしようと努力しました。

又次郎が、我妻佐次右衛門・こん夫婦の長女・つると入夫婚姻して我妻家を相続  
したのは明治26年6月(又次郎26歳・つる20歳)で、その後、又次郎は、明治28年11  
月母校(校名は明治26年「米沢中学校」から「米沢尋常中学校」に改称されていた)に助  
教諭心得待遇で奉職(月給わずか8円)。

その後、校名が「山形県米沢中学校」に改まる明治33年教諭心得(月給32円)に  
昇格し、校名が「山形県立米沢中学校」に改称される翌明治34年2月によく教  
員免許を取得して、同年3月8日付で教諭に任じられた。このとき又次郎は34歳<sup>(90)</sup>

(89) [七戸注]我妻栄「(身辺雑記)検定試験」ジュリスト306号(昭和39年)31頁……〔所収〕『民  
法と五十年——身辺雑記(4)』前掲I注(115)22頁。

(90) 又次郎は、第13回教員検定の予備試験(明治32年11月22日～12月4日)に合格するも(明治  
33年1月22日官報4964号240頁)、しかし、第13回の本試験(明治33年2月13日～3月2日)で  
は合格できず(明治33年3月9日官報5003号には名前がない)、翌明治34年の第14回試験(明治

になっていたが、一方、栄はまだ3歳11か月であったから、「検定試験」（文部省教員検定試験。いわゆる「文検」）の言葉に怯えたという彼の話が真実ならば、恐ろしいほどのトラウマである<sup>(91)</sup>。

竹内洋はいう。「日本の立身出世主義はよくいわれるように単に個人の上昇欲求だけではなく、家（家名）や故郷によって刺戟された。……〔中略〕……。／つまり、日本社会の競争は、親と子あるいは祖父母と孫にわたるリレー競争なのである。だからリターンマッチは個人主義社会のように本人一代にかぎらない。子の世代でも孫の世代でもよいのである<sup>(92)</sup>」。又次郎・栄親子は、その典型的なサンプルともいべき存在である。

### （イ）「痛癩持ち」の血筋

【83】 又次郎は、26年間の長きにわたって米沢中学で英語を教え、大正10年10月55歳で退職した後は、妻・つる、末娘（四女。当時小学校5年）千枝（千枝子）とともに、同年（3月31日）東京帝大の助手に就任した一人息子の栄を頼って上京した。栄が親友・金田一人の遺稿『身も魂も』を編んでいた時期である。

その後、栄が留学から帰国して縁と結婚した後も、又次郎・つる夫婦と千枝は、栄・縁夫婦の家に同居するが、栄の二男・堯によれば、「私がうまれて〔堯は昭和5・1・9生〕間もなく、祖父は荻窪の伯父〔又次郎二女・千代子【94】の夫・孫田秀春〕

34年2月1日～25日）でようやく合格した（明治34年3月7日官報5300号127頁）。

(91) 当時の中学校教員の資格制度一般および「文検」制度に関しては、牧昌見『日本教員資格制度史研究』（風間書房、昭和46年）307頁以下、426頁以下、寺崎昌男＝「文検」研究会（編）『「文検」の研究——文部省教員検定試験と戦前教育学』（学文社、平成9年）、山田浩之『教師の歴史社会学——戦前における中等教員の階層構造（松山大学研究叢書第38巻）』（晃洋書房、平成14年）73頁以下、151頁以下、寺崎昌男＝「文検」研究会（編）『「文検」試験問題の研究——戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習』（学文社、平成15年）参照。

一方、松野良寅・前掲注（85）177頁によれば、「明治の中期・後期に米沢中学で教鞭を執った教師の学歴及び教員免許取得の状況を調べていますと、その履歴書に〔検定〕と記されているものが14名で全職員の約12パーセントです。……中等教員の資格を取得している教師にまじって、物理学校や各種英学塾修学者（無資格者）がかなりいます。ただ、又次郎ら無資格者が12パーセントという数字は、やはり少数派であり、肩身は狭かっただろう。

(92) 竹内洋・前掲注（5）34-35頁。

(93) なお、宮沢俊義は、我妻の石神井の家の庭（【68】参照）について、次のようなエピソードを紹介している。「かれ〔我妻〕が、現在のすまいを買ったとき、その庭を恩給園と名づけたという。まだ元気だった父君が、その恩給で、その庭にだんだん手を入れて行くのだという話だった。そういう話をするときのかれの嬉しそうな顔がおもい出される」。宮沢俊義「我妻君ゆく（特集：追悼・我妻栄氏）」世界337号（昭和48年）221頁。

の家に行ってそこで脳溢血で倒れ、1週間後に担架にのせられて帰って来た。……祖父は幸いにしてその後、健康を回復し、後遺症も軽く、私の小学校時代まで真鶴の別荘で余生を送った<sup>(94)</sup>。昭和18年6月18日午前11時45分尿毒症のため真鶴の別荘で死去<sup>(95)</sup>。葬儀は石神井の自宅で仏式により執り行われた。なお、享年76歳は、息子・栄が死去した年齢と一緒である。

【84】ところで、堯は次のようにいう。「祖父の兎雷也先生〔ポマードを買う金もなく髪の毛が逆立っていたことから生徒たちが又次郎につけた綽名〕は非常な癩癩持ちでございまして、これは父にも多少遺伝しておりますし、私にも遺伝しております<sup>(96)</sup>」。堯に限らず、家族の者は、栄が癩癩持ちであったと口を揃えて証言する。

ただ、年齢とともに気質が変化してゆくのは、誰にでも認められる事象であり、すでに触れたように、我妻は、若い頃の洗練された都会人から、年齢を重ねるにつ

(94) 我妻堯「父と健康」「追想の我妻栄」前掲I注(63)420頁……〔転載〕我妻堯「(回想・日々の我妻栄⑥)父と健康」我妻栄記念館だより15号(平成22年)2頁。

(95) なお、我妻の真鶴の別荘の買受当時の地番は神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜字船岡69番の1。この土地は大正8年に園田三郎助(銀座七丁目10番の半標商「糸り治本店」主人・園田治郎吉の長男、明治13年4月生)が地元民から買い受けたもので、昭和11年に畑から宅地に地目変更がされた後、昭和14年10月18日園田「三郎助」から園田「治郎吉」への名義変更(父の名を襲名したようである)登記のうえ、同日東京市板橋区石神井南田中町1071番地・我妻栄に同日売買を原因とする所有権移転登記が経由された。

一方、我妻堯「(回想・日々の我妻栄④)我妻栄の別荘(その2:真鶴)」我妻栄記念館だより13号(平成20年)2頁によれば、「栄は昭和13〔14〕年(1938〔1939〕年)に真鶴に別荘を建築したが、前号で紹介した軽井沢の学者村とはちがって、何故真鶴を選んだのか、その正確な敬意〔経緯〕は筆者にも判らない。当時栄は、文理科大学(後の教育大、現在の筑波大)の綿貫〔哲雄。1885-1972〕教授と親交があり、教授からご自身の別荘の近くに良い土地があるからと勧められたのが理由かも知れない」。「現在、この土地には「ラ・シェネガ」というホテルが建築され、海の見晴らし・南欧風の建物とフランス料理を売り物にしている」。

(96) 我妻堯・前掲注(38)263頁……〔再録〕前掲注(38)148頁。堯は、祖父・又次郎の癩癩をめぐり、次のようなエピソードを紹介している(288-289頁……〔再録〕166-167頁)。「みそ汁についてはひとつ我が家には大きな思い出がございまして、母〔緑〕がよっぽど口惜しかったらしくて、かなり年をとるまで言っておりました。これは母が結婚して間もなくの出来事です。……私の母は先ほど申し上げなかったかもしれませんが、神田の生れで上野で育てておりますから純粋の江戸っ子でございます。父は米沢の田舎からということで、そこへ又次郎おじいさんが出てきて石神井で同居を始めたわけです。母がある時、みそ汁の実(み)にじゃがいもを入れたんです。今はどうか知りませんが、みそ汁の実(み)にじゃがいもを使うとその当時はあまり米沢はありえなかったことではないかと思うんですが、又次郎じいさんは例の癩癩を起こしまして、卓袱台の上でひっくり返したらいいんですね。『こんなものは食えるか』と。これは母がずい分年をとってから話題にしていたことでございますので、家ではじゃがいものみそ汁というのはタブーになっております。それ以後、緑はじゃがいもを口にしなくなったという。加藤恭子=我妻令子・前掲注(4)16頁も参照。

れて東北人の「田舎の村長さん」へと変化した。

この点に関して、二男・堯は、「私の記憶している父の生涯は2段階に分かれます。／若い時から終戦直後の本当に働き盛りの時代と、それからかなり年をとってきてからの父とでは、多少行動とか趣味とか食生活に変化が出てまいります」と述べるが、社会的な活動内容の変化に関しては、昭和32年に東大を定年（60歳）退職した後、憲法問題研究会に参加して政治方面に積極的にコミットするようになった時期が、顕著な転換点である。

なお、長男・洋の妻・令子によれば、義父・栄の気質は、その後、晩年になって（昭和49年10月21日76歳で死去）、さらに変わったようで、「何か悟りをひらいたというか、あるいは、ものごとをそのまま受け入れられる心境に達し始めているような思いを抱いた。ひところは、シンラツな人物批評を楽しんでいるように見えた義父の口から、そうした言葉も余り聞かれなくなっていた。／昔の義父はそうではなかった」<sup>(97)</sup>。

我妻が「シンラツな人物批評を楽しんでいる」場面は、随筆や対談の随所に認められる。星野英一も「先生の人物評・学問評が適切辛辣で寸鉄人を刺すものがあったことも、よく知られている」という<sup>(98)</sup>。

こうした我妻の激しい一面は、穂積重遠や鳩山秀夫からは遠く、末弘巖太郎に近いものを感じる。ともあれ、我妻をもつぱら温厚な聖人君子のごとく紹介する文章については、割り引いて受け取らなければならない。

## Ⅰ 叔父（遠藤駒蔵三男）遠藤〔→大瀧→広瀬〕三作

【85】 又次郎のすぐ下の弟（又次郎の4歳年下、明治2年生まれ）三作に関しては、長兄・遠藤茂作や、末弟・遠藤（大瀧）鼎四郎と異なり、まったく語られることがない。わずかに、松野良寅（編）『我妻栄——人と時代』が掲載する遠藤家の略系

(97) 我妻堯・前掲注(38)254頁……〔再録〕前掲注(38)141頁。

(98) 我妻令子・前掲注(72)416-417頁。

(99) 星野英一「『新制高校の教師になっても学問を続ける覚悟』」「追想の我妻栄」前掲Ⅰ注(63)231頁……〔所収〕星野英一『我妻栄先生を偲ぶ』（星野英一、昭和52年）18頁。さらに、「（座談会）人間・我妻栄を語る」「特集：我妻法学の足跡」前掲Ⅰ注(37)60頁……〔所収〕星野英一『我妻栄先生を偲ぶ』（星野英一、昭和52年）59頁「星野……。人に対しては、先ほどちょっとお話が出ましたように、それぞれの人をよく見抜いていて、雑談のときなどに人の批評をかなりしんらつになさったようです」。

図が、大瀧家に養子に入るも離縁し、その後、広瀬家の娘・つると入夫婚姻した事実を伝えるのみである。<sup>(100)</sup>

オ 叔父（遠藤駒蔵四男）遠藤〔→大瀧〕鼎四郎

【86】 又次郎より8歳年下の末弟（遠藤駒蔵四男、明治7年生まれ）鼎四郎は、4人の兄弟の中で最も優秀である。戸籍関係は多少複雑で、明治25年2月当時大瀧家の養嗣子となっていた兄（駒蔵三男）三作の養子となった後、翌3月三作の離縁と広瀬家への入夫婚姻に伴い、大瀧家を家督相続したもののようである。<sup>(101)</sup>

中学（米沢中学か）卒業後は、明治29年第一高等学校二部工科に進学、明治31年卒業後は、東京帝大ではなく、京都帝大・理工科大学の電気工学科に進む（同学科第1期生・入学7名）。明治34年7月卒業（卒業5名）後は、講師として京大に残り（「電気工学製図及実験」担当）、翌35年には助教授に昇進するが（電気工学第3講座分担）、明治39年に職を辞して京都市に転職する。

大学を去った理由は判然としない（なお、第3講座を共同担当していた主任教授・難波正も、欧州に渡航して担当から外れている）。ただ、京都市では、ちょうど、日露戦争後の電力・水道重要の急激な伸びに対して、琵琶湖疏水の既存の第1疏水（明治23年完成）だけでは応じきれず、第2疏水の開削が決定された時期だったので（明治39年4月内務省許可、9月京都市会予算可決、41年着工、45年完成）、京都市が強く望んだことは確かであろう。

孫田秀春によれば<sup>(102)</sup>――

……父〔又次郎〕の末弟に大瀧鼎四郎という京都帝大の工科を出て京都府〔京都市〕の技師をしていた偉い工学士の人がいたのである。この人は例の琵琶湖の水を京都へ引いて行ったインクラインの疎水工事〔第2疏水の電気関係〕を計画し成功させた人であって、京都では神様のように崇められていた人であった。私も度々お目にかかったが、態度は頗る横柄であったけれども、成る程偉そうな人だなァという感じは受け

(100) 『我妻栄——人と時代』前掲注(32)72頁。

(101) 『人事興信録(第5版)』(人事興信所、大正7年9月15日)を88頁、『人事興信録(第6版)』(人事興信所、大正10年6月15日)を78-79頁、今田醒民(編)『山形名家録』(山形名家録編纂局、大正11年)226頁、『人事興信録(第7版)』(人事興信所、大正14年8月5日)790頁。

(102) 孫田秀春『私の一生』前掲注(73)55頁、「千代子と栄と私の貧乏物語」前掲注(73)7-8頁。なお、松野良寅『我妻栄——人と時代』前掲注(32)82-83頁、松野良寅・前掲注(86)181頁も参照。

た。つまり我妻栄も工科を修めてこの叔父さんのような偉い人になりたいと思ったのは当然のことであつたらうし、また工科へでも入っていたらこの叔父さんが学資金の補助位はしてくれるかも知れないといったはかない望みを我妻父子が抱いていたのであつたかも知れない。

鼎四郎は、正七位・京都市の技師長兼電気部長まで昇って、大正13年前後に退職するが、結局、甥の栄を援助することはなかった。

【87】 鼎四郎の妻・かん（明治11年1月生まれ）は、山形県人である小見清松・よし夫婦の二女で、鼎士郎・かん夫婦の間には、長男・雅雄（明治32年7月生まれ）、長女・京（明治40年8月生まれ）、二男・健夫（明治37年1月生まれ）、四男・雄三（明治45年4月生まれ）、五男・恒夫（大正5年9月生まれ）、三女・幸（大正9年4月生まれ）の子がいたが（三男・二女は夭折したものらしい）、すでに触れたように、四男・雄三は、伯父（遠藤駒蔵長男）茂作の養子となって、遠藤家を継いだ。

【88】 一方、二男・健夫に関しては、我妻栄の次のような文章がある。<sup>(103)</sup>

しかし、学生諸君が「法協」を買ったのは決して試験のためだけではありませんでした。1つのエピソードを申し上げます。私が最初に受け持った学生は昭和4年卒業ですが、その中に私の「いとこ」がおりました。たしかその当時の静岡高等学校の卒業でした。……入学の当初のある日に私にこういうことを言いました。今日先生にいろいろ話を聞いたので友だちと2人で小使室に雑誌を買いに行った。おそろおそろ「雑誌をください」と言ったところが、小使は「どっちの雑誌だ」と大きな声を出した。そのころ生徒をどなりつけるので有名なおじいさんの小使がいましたが、たぶんそれにやられたんでしょう。当時も「法学協会雑誌」と「国家学会雑誌」を小使室で学生割引をして売っていました。そこで「法学協会雑誌」と言ったところが「法協か!」といった。ははあ「法協」というのか、「法学協会雑誌」と長い名をやっと正確に覚えていったところが、小使は「法協」という。なるほど「法協」といえはくろうとらしく聞こえる、と友人と感心したという話です。

大瀧鼎四郎の二男・健夫は、我妻より7歳年下で、上記我妻の文章にもあるように、静岡高校を出て、昭和4年に東京帝国大学法学部法律学科を卒業したが、

(103) 我妻栄「判例研究会の生い立ち」法学協会雑誌83巻（昭和41年）9・10号……〔所収〕『民法研究X講演』前掲注（64）350-351頁。

卒業後は、以下にあるごとく、静岡の名士となった<sup>(104)</sup>。

同社〔静岡乗合自動車株式会社〕に取締役支配人として、戸塚〔昌宏〕社長を補け経営の掌に当って居る、大瀧健夫君は、山形県の出身。父君が京都市電気局長であった様な関係上、中学は京都一中に学び、静岡高等学校を経て、東京帝大経済学部〔法学部法律学科の誤り〕を出たのが昭和4年で、公人?となったのは昭和6年駿豆鉄道株式会社の支配人に就任したのが最初である。静岡乗合の関係は昭和10年駿遠自動車創立の際に参加し、成立するや支配人に就任12年静岡自動車を買収して静岡乗合自動車と改称の際、取締役支配人となり敏腕を振ひつゝ、今日に及んで居る。明らかな人物でお坊ちゃん育ちにも似ず苦勞人らしい思ひ遣りがあり、会社従業員の全部から慕はれてゐる徳望家である。

## (2) 母・つる

### ア 祖父・我妻佐治右衛門

【89】 我妻栄の母・つるの実家である我妻家に関しては、弘化3年(1846年)「町方民数帳」の「鉄砲屋町」絵図に、栄の生家(現在の我妻栄記念館)と同じ場所に、「鍛冶渡世」を業とする「左次右衛門」の名前が認められ、この人物が、我妻の母方の曾祖父と推測されている<sup>(105)</sup>。

次代・我妻の祖父も「佐次右衛門」の名を襲名しているが、生没年は不明で、「明治何年まで鍛冶屋を続けたかは明らかでない。ただ、栄の母つるが明治16年10歳で我妻家を相続しているところから、この年以前に鍛冶屋は廃業したものであろう」とされる<sup>(106)</sup>。

### イ 母(我妻佐治右衛門長女) 我妻つる

【90】 我妻の母・つるは、我妻佐次右衛門・こん夫婦の長女(一人娘)として明治6年1月11日に生まれた<sup>(107)</sup>。

明治12年6月研精女学校(明治8年門東町下に開設された女子生徒対象の私立学校)

(104) 『静岡と人物——聖戦第4年(上巻)』(静岡発行所、昭和15年)62頁「大瀧健夫氏」。

(105) 『我妻栄——人と時代』前掲注(32)73頁、小野栄「我妻栄の生家と鉄砲屋町」『我妻栄——人と時代』前掲注(32)303頁。

(106) 小野栄・前掲注(105)308頁。

(107) 『我妻栄——人と時代』前掲注(32)76頁、我妻堯・前掲注(38)253-254頁……〔再録〕前掲注(38)141頁。

に入学するが、翌13年同校を含む城下の9つの初等教育機関（松岬・東堤・西堤・北堤・長堤・松江・南溪・桜堤・私立研精）は統合されて生徒数1400人の興讓学校となり、つるは明治16年11月同校の上等第4級を修了後、翌12月同校の裁縫席別課生となる。

その後は、明治21年8月興讓尋常高等小学校（明治20年興讓小学から改称）の授業雇、翌9月山形県女教員講習会の会員となって教員講習を受け、同年12月山形県師範学校長名で「講習学科完了証書」を授与され、また山形県より「明治22年4月1日ヨリ明治26年3月31日マデ4箇年間尋常小学校読書唱歌裁縫科ノ教員仮免許状」を授与されて、2年後の明治23年1月から24年8月までの1年半の間、興讓尋常高等小学校の尋常科の教壇に立った。このように、栄の父・又次郎や、伯父・遠藤茂作と同じく、母・つるもまた、初等教育に関しては、まったくの素人ではない。そして、この教員としてのキャリアが、一人息子・栄に対する教育に反映されたように思われる。

なお、上記のように、つるは明治16年10歳で我妻家を家督相続し、明治26年6月つる20歳のとき遠藤又次郎（26歳）が入夫婚姻で家督相続しているが、長女・もとゑ（元枝）の誕生は明治26年3月2日のことであるから、入夫婚姻の届出以前から二人は一緒に暮らしていたのだろう。

大正10年米沢中学を退職した夫・又次郎、末娘・千枝（千枝子）とともに東京に出て、同年東京帝大に奉職した栄と暮らすようになるが、又次郎が病に倒れた昭和5年の11月11日に死去。栄の二男・堯は「今から考えると脳梗塞ではなかったか」とするが、<sup>(108)</sup>発症の原因は、家族の看病疲れ（脳溢血の夫・又次郎のほか末娘・千枝も結核で伏せていた）ともいわれる。享年57歳。

【91】 我妻の二男・堯は、「父は母親のことをいろいろ私に話をしてくれましたが、おつるおばあさんというの<sup>(109)</sup>は非常に偉い人だったということを私に繰り返しております」と語っているが、我妻に関しては、母にまつわる次のようなエピソードも伝えられている。「我妻先生は、あるとき『米沢こども新聞』の豆記者の『先生はどうしてそんなに勉強なされたのですか』という素朴な質問に答えて『お母さん

(108) 我妻堯・前掲注(38)274頁……〔再録〕前掲注(38)156頁。

(109) 我妻堯・前掲注(38)262-263頁……〔再録〕前掲注(38)147頁。

を喜ばせたかったからですよ』と言われたという<sup>(110)</sup>。

また、遠藤浩は、「我妻先生のお母さんは、やさしくて、我慢強く、しかもしんの強い人だった」と述べる一方、晩年の我妻について、次のように語っている。「我妻先生は、亡くなられる2ヵ月前に米沢に来られ、虫の知らせというものであろうか、先生の母上と縁があり、先生が子供のとき行かれた米沢より30キロほど北の朝日岳に近い白鷹町を訪ねられた。山深い田舎で、しんとした町である。先生はあの山を見られて昔に返られたのであろう。先生は無闇にそこに行ってみたくないのでに違いない。誰にもそういう思い出があろう。人生の最後に、故郷の山を飽かず眺められたのである。故郷の山であるが故に……」<sup>(112)</sup>。

### (3) 子供たち

【92】 我妻栄に関しては、さらに、姉2人、妹2人に挟まれた唯一の男子であったことが、親の期待と本人の心理的重圧の生まれる大きな原因となっていた。

2人の姉のうち、①長女・もとゑ（元枝）は、上述したように、栄より4歳年上の明治26年3月2日生まれ、②二女・ちよ（千代〔子〕）は、栄より2歳年上の明治28年3月27日生まれ、2人の妹のうち、③三女・うめ（梅〔子〕）は、栄より5歳年下の明治35年3月11日生まれ、④末娘（四女）の千枝（千枝子）は、栄より13歳年下の明治43年6月20日生まれである。

#### ア 長女・もとゑ（元枝）

【93】 長女・もとゑ（元枝）の学歴は不明であるが、大正2年20歳で国鉄技師・大石大助と結婚している。

没年に関しては、栄の二男・堯が、「私の記憶では50代で姉は2人とも亡くなっております。1人は慢性腎炎で尿毒症になって死んでおりますが、今だったら透析をやれますから70、80まで生きたかもしれません」と述べているが<sup>(113)</sup>、しかし、次姉・千枝は74歳まで生きているので、腎炎のため50歳代で亡くなったのは、長姉・元枝であろう。彼女の生年（明治26年生まれ）から計算すれば、逝去したのは、戦

(110) 曾根伸良「真摯な語りかけ——『我妻栄先生講演集』を読む」『我妻栄——人と時代』前掲注(32)146頁。

(111) 遠藤浩『百花繚乱たれ』前掲I注(3)7頁。

(112) 遠藤浩『百花繚乱たれ』前掲I注(3)12頁。

(113) 我妻堯・前掲注(38)272頁……〔再録〕前掲注(38)154頁。

時中の昭和18年から終戦直後の昭和28年の間ということになる。

なお、元枝・大助夫婦の子（我妻の甥）大石尚は、「考えて見ると私程甥姪の中で叔父様に世話になり可愛がられた者は恐らく無いと思います。学生時代父が務めの関係（鉄道官吏）で金沢に転勤になったため、私は石神井の我妻邸に3ヶ月も厄介になったことがあります<sup>(114)</sup>」という。尚は、我妻の死去する1か月前にも、父・大石大助の生前からの土地争いの相談のため、我妻を法務省の顧問室に訪ねており、長姉の嫁ぎ先との間の関係は緊密だったようである。

### イ 二女・ちよ（千代子）

【94】 二女・ちよ（千代子）に関しては、夫・孫田秀春の方から話すのが分かりやすいだろう。

孫田の生家から500メートルほど離れた隣部落出身の高世重右衛門（叔父・木村弥次郎が孫田と小学校以来の親友）によれば<sup>(115)</sup>——、

法学博士孫田秀春先生の生家は、山形県長井市草岡で（旧西根村その以前は草岡村〔山形県西置賜郡西根村大字草岡〕）田圃の中に戸数50戸ばかりの農家が集落を形成しているところで、小字は大沖という部落である。……。

秀春先生の家も農家ではあったが〔ただし「苗字帯刀御免」の家〕、厳父秀助氏はすばらしい経済家で、山林田畑を相当に所有し、土蔵・米倉・小屋・物置など住居〔築200年の由緒ある大邸宅〕の周囲にズラリと構え、一時は男の年雇を3人もおき、田畑を耕作するかたわら、近在から繭や生糸を買い求め、屋敷内の小屋に機械娘20人程も頼み絹織物を製造し、長井紬として販売、木材や味噌醤油の販売まで手がけたという。今でいうなら農工商一体の経営をやられた企業家であられた。又張りのあるリンリンとした豊かな声量の持主で近隣の若衆に謡曲の（金剛流）師匠などを勤め、後年弟子たちからその功を感謝されて邸内に記念碑など建立され現存している。

一方人の面倒をよくみる人で、困った人を助け、米や銭を貸し、「催促なしの有る時払い」の方式もたびたびあったようだ。従って人の信用も厚く、草岡区という大字の区長や、旧西根村の村会議員や各務委員なども勤められた方である。

(114) 大石尚「叔父様」『追想の我妻榮』前掲I注(63)149頁。

(115) 高世重右衛門「秀春先生のこと」孫田秀春先生米寿祝賀記念論集『経営と労働の法理』（専修大学出版局、昭和50年）532-534頁。

母堂はるさんは、かしこく器量のよい人だという評判が高く、気長で優しいが几帳面で躰には厳しい人であられたようだ。当時は電燈もないので、暗いところでも置物はいつもすぐわかるようにと、常に鍋は流し（炊事場）に一列に並べ、鍋のつるも一方に全部整然と揃えてその鍋はいつもピカピカと黒光りに光っていたということだし、当世帯主など18歳になるまで夜遊びの外出は許可されなかったといえます。

秀春先生は、このご両親のもと嚴父40歳、母堂37歳の時、明治19〔1886〕年3月13日（旧2月8日〔百姓家ではぼた餅を就いてお祝いした祝日の午前10時半頃〕）に誕生されている。

生まれた時、臍の緒を首にからんでいたのが、家人は駄目だと思ってか“くるみこ”に包んでそのまま藁筵の上においていたがそこへ家の前の女が見舞にきて、みどり兄に触れてみたら動いた。今まで3人も女でしかも今度は男子なので〔3女1男の末子〕一家は驚いて大事に看護したところ生き返ったという数奇な誕生だったのである。……。

臍の緒を首に巻いて生れた人はよく今朝男とか、今朝次とかいう名前が命名されたものだが〔「袈裟男」「袈裟次」等と同じ由来〕、先生もそういうことで「今朝次」という名前を頂戴したらしい。

先生はその名前が嫌で一高生〔3年生〕時代に父母の名前を1つづつ頂戴し現在の「秀春」というお名前に改名された……。

【95】 孫田は明治25年草岡尋常高等小学校に入学、29年尋常科卒業後は長井高等小学校に進み、33年山形県米沢中学校（翌34年より山形県立米沢中学校）に入学した際、我妻家に2年間寄宿したのが、我妻家との結びつきの発端である。このとき長女の元枝は7歳、二女・千代子は5歳、長男の栄はまだ3歳で、14歳の今朝次（のちの秀春）の遊び相手にはならなかったけれども、門の横の大きな桜桃の木に登って、熟した実をもぎとって子供たちに投げ与えたという。

その後、今朝次（秀春）は学生寮に移り、明治38年卒業後は父の希望で仙台医学専門学校に進学するが（今朝次（秀春）は唯一の男児であったが、孫田家は長女の婿が嗣ぐことに決まっていた）、医師を嫌い親に内緒で退学して40年第一高等学校独法科に転じたため、父は激怒して息子を勘当、日本銀行重役の門番となって苦勞するが、半年後に勘当が解けて一高の寄宿舎に入寮した（東寮3番室）。

独法クラスで同級の小林俊三（1888-1982）によれば、「旧制一高1年のはじめに孫田秀春〔今朝次〕君が自己紹介をしたとき白哲長身の兄貴形に見えたが少し東北弁があった。……。それにしても山形弁という東北弁は独逸語の発音にはじゃまになるどころか、むしろ一脈くろとじみた独逸語に聞こえたのは妙であった」〔孫田君は独特の山形弁で独語に正確な歩をすすめていた〕〔結局孫田君の向陵時代は、……山形県人特有の健実〔堅実〕と耐久の面を寮友に覗かせた青年期の姿であった〕<sup>(116)</sup>という。

【96】 明治43年卒業後は東京帝国大学法科大学独法科に進学するが、その間も我妻家には実家同然に出入りしており、明治44年大学2年生の夏休みにも、我妻家を訪ねて泊まり込んでいる。このとき二女の千代子は16歳、3月に米沢高等女学校を卒業して、奈良女子高等師範学校に進学していた。弟・栄は中学2年生で、卒業後の進学を支える資力は、我妻家にはなかったため、千代子を女学校の教師として働かせ、その収入の一部を弟・栄の学費へ回すことで、話がまとまっていたからである。「私の運命とでも申しませうか。私も今はすっかり諦めました」という千代子の言葉に、孫田は声も出ず、東京に帰った後、一高以来の親友たちに打ち明けたところ、松永正虎と井田輝吉が、孫田に相談もなしに米沢まで出向いて、両親を説得して千代子を孫田の嫁に貰い受けて来た、という乱暴な話である。

千代子は、同年のうちに奈良女高師を退学して、東京の孫田の許に嫁ぎ、当初、孫田は彼女を日本女子大学に入学させて寮生活をさせていたものの、孫田も大学生ゆえ生活は苦しく、翌明治45年ちよは大学を退学して本郷真砂町の一間で孫田と結婚生活を始める。その後、大正3年3月に弟・栄が中学を卒業して上京してくると、本郷西片町の裏通りに安借家を見つけて、栄の一高合格・入寮までの半年間3人の貧乏暮らしが続いた。

結局、孫田は、病気で1年休学して大正4年5月卒業。その後は岩手県の属官となるも、その後いくつかの職を転々とした後、東京帝大の恩師・三瀧信三の推挙で大正7年東京高等商業学校に奉職、大正8～12年フランス・スイス・ドイツに留学し、帰国後は東京商科大学助教授（昭和2年教授）兼予科教授となる。<sup>(117)</sup>

(116) 小林俊三「向陵時代と孫田秀春君」前掲注 (115) 412頁、415頁、415-416頁。

(117) 「孫田秀春（幼名今朝次）略歴」前掲注 (115) 551頁以下。

帰国直後の講義を受講した相馬勝夫は、「私の商大予科時代における先生の印象は、ヨーロッパ帰りのしょう洒な少壮学者、ご郷里の山形訛で示される無骨の一面が時に顔を覗かせるというものであった」といい、高橋泰蔵は、「殊に、無暗(?)と飛び出す独乙語の法律学語の上に、先生特有(?)の東北訛りの、少し鼻にかかった発音には悩まされたのであった」という。

また、長谷部茂吉によれば、「先生はお客が好きで、いまでも近所の碁客を誘って盛んに碁を打っておられると思うが、私がお尋ねしてもかつて機嫌の悪いお顔を見せられたことはなかった。元来が交際好きな、性格の派手なご性格のように思える。時たま奥様が私にその<sup>(ママ)</sup>ところをおこぼしになったことがあるし、我妻先生も姉君の愚痴をおききになったらしく、私に『孫田はもっと生活設計をしっかりとてなければ』などと話されたこともあった」。

【97】 なお、長谷部によれば、「私は一高には行って間もなく、先生に伴われて一度田端にある我妻先生のご両親のお住居に参上した。これが、私を我妻先生御一家と結びつけた最初である。当時我妻先生は留学中で、お宅にはご両親とお茶の水高等女学校〔当時は東京女子師範学校附属高等女学校〕に在学中のお妹さん〔末妹の千枝〕がお元気でおられ、家庭的な雰囲気の下でいろいろ歓待して下さいました。私が一高2年のとき、我妻先生は留学から帰られ、たまたま私が孫田先生の曙町のお宅に伺ったときおられてお目にかかった。最初の印象はいかにも若々しいいわば生きのいい少壮学徒という感じであった」。

その後、孫田は、戦時体制期に超国家主義に走ったことから、終戦後に公職追放・教職追放を受けるが、詳細に関しては自伝等を参照されたい。

(118) 相馬勝夫「先生と私」前掲注(115)406頁。

(119) 高橋泰蔵「洋行帰りの孫田先生——石神井時代の一学生として」前掲注(115)417-418頁。

(120) 長谷部茂吉「孫田先生と私の学生時代」前掲注(115)442頁。

(121) 長谷部茂吉・前掲注(115)442-443頁。

(122) 遠藤浩『百花繚乱たれ』前掲I注(3)84頁「一橋大の教授で『国体の本義』〔孫田秀春＝原房孝『国体の本義解説大成』(大明堂書店、昭和15年)〕などという分厚い右翼本を著したこの人〔孫田〕は、国粋主義者の理論的部分を支えた大きな土台のような存在で、欧米の法制度を研究する我妻先生のことを『榮はヨコだからだめだ。研究はタテをやれ』と、日本の歴史さえ見すえていればいいのだといわんばかりに欧米研究の姿勢なども批判しました」。

(123) 孫田秀春『私の一生』前掲注(73)、孫田秀春先生米寿祝賀記念論集『経営と労働の法理』前掲注(115)のほか、孫田秀春『労働法の開拓者たち——労働法四十年の思い出』(実業之日

妻の千代子は昭和44年8月74歳で死去、孫田はその7年後の昭和51年11月10日90歳<sup>(124)</sup>で老衰のため死去した。

### ウ 長男・栄

【98】 次に、5人の子供の真ん中の栄について。

二男・堯によれば、「父は幼少の頃、非常に弱くて病気がちであり、果して成人できるかどうか、危ぶまれていたということを父から聞いたことがある。祖父は弱い父を魚釣りにつれ出したり、（これは後に父の趣味の一つとなった）「しらぶの高湯」という温泉場に湯治に行ったという話も聞いた<sup>(125)</sup>」。

なお、この温泉場に関しては、明治42年（我妻12歳・中学進学の時）刊行の『米沢案内』に、次のようにある。<sup>(126)</sup>

#### 白布高湯

南置賜郡南原村大字関に在り米沢市を南に距離約四里吾妻山の半腹にして正和年中の開湯なりと伝ふ湧出口は薬師平の一部岩石の間より混々として出つ其量多くして小河をなす温泉宿は是より数町東北の下に距る眺望稍々佳なる所に在り旅舎三戸に過ぎさるも浴客三百余を容るの設備あり冬期を除くの外浴客絶ゆることなし温泉の効能は佐の如し

胃病、胃弱、胃痛、月経通〔痛〕、貧血、陰門加答兒、痲疾、瘰癧、挫傷

又旅舎の西南に大瀧あり高さ数十丈断岸絶壁甚た壯観なり避暑に最も良し慶長九年上杉景勝上洛して伏見に在りし時直江山城守も扈從し官務の余閑所々を遊覽し泉州江州辺に至り鉄砲師に交り米沢に来らば厚く恩賞を与へんことを約し江州より和泉屋松右衛門泉州より吉川惣兵衛を招く景勝大によろこひ兩人に各百石を給す山城守世人の喧噪

本社、昭和34年）……〔再版・改題〕孫田秀春『労働法の基点——労働法の開拓者たち』（高文堂出版社、昭和45年）。

(124) なお、孫田が戦後教授を務めた専修大学の図書館「孫田文庫」には、千種達夫が描いた孫田夫妻の肖像画が収蔵されているという。千種達夫「思い出すことども」前掲注(115) 442-457頁。

(125) 我妻堯・前掲注(94) 420頁……〔転載〕前掲注(94) 2頁。

(126) 市川藤太郎『米沢案内』（米沢市立町・盛文堂書店、明治42年4月）62-63頁。白布高湯は、我妻にとって、思い出の場所らしく、昭和44年の講演でも「私もたびたび白布に行っていますから、最近の白布の様子はよく知っています。／＼しかし『白布高湯』といったとき、私の頭の中にでてくるイメージは、現在のものとまるで違います」と述べる。我妻栄「母校の生徒諸君へ」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲注(38) 27頁……〔所収〕『民法と五十年（その3）随想拾遺（下）』前掲注(39) 297頁。

を避けんか為め此兩人を白布の高湯に招き鉄砲数十挺を鑄さしめたる遺跡あり

その後、成長した後の我妻は、体格も小柄で、青年時代には胃腸が弱く、毎年風邪をひいてばかりおり、スポーツもそれほど得意ではなかったが（ただし逆立ちは巧みだったという）、昭和5年33歳のときに左脚を痛めて松葉杖の生活になるまでは、弓道や野球・テニスなど、いろいろな運動に手を出してはいた。

### エ 三女・うめ（梅子）

【99】 栄より5歳年下のうめ（梅子）は、兄・栄との幼少時代を、次のように追懐<sup>(127)</sup>する。

小さい時は8畳の座敷で畳のへりを界にして2人で羽子をついたり、おしくら饅頭をして畳から出しっこをしたり、私を相手に遊びました。2人勉強しておそくなると、兄の好きな物を買いに走りました。8畳の座敷で端然と座って勉強にいそむ兄の姿が今でも目にみえるようです。第一高等学校に入学致しましてからは、庭のさくらんぼが赤くなる頃帰郷するのが常でした。私はさくらんぼの赤くなるのが待遠しく毎日木の下で赤くなるのを待ちました。街の外れから両手に土産をさげて歩いてくる兄の姿を見出すと、母親と私は門の外までとび出し、よろこび勇んで迎えたものでした。一人息子の兄の帰国を両親がどんなにかよろこび迎えたことでしょう。

うめは、竹前さんの養子となった後、兄・栄が大学を卒業する大正9年に、伊藤祐吉と結婚する。伊藤は、戦後、興国鋼線索の重役等を務めた人物であるが、学歴等は調べきれていない。ただ、うめの次のような追憶談からすれば（時期は我妻の留学前の大正9～12年大学院特選給費生・助手・助教授時代の頃か）、我妻と同様、大学出のキャリアと推測される<sup>(128)</sup>。

私が嫁ぎまして深川に居りました頃、外国語学校のフランス語科の生徒さんを教師に招き、私の主人と一生懸命仏語の勉強をやったことを想い出します。兄は1週間に2度わが家にまいりました。もう五十余年もたちますが、頭をよせあった3人の姿が今でも目にみえるようです。その時の記念に兄から銀の紅茶のスプーンを頂きました。私は今でも大切に使っております。

その後、我妻は、伊藤の事業の借金の連帯保証人になって、窮地に陥ったことも

(127) 伊藤うめ「さくらんぼの赤くなる頃」『追想の我妻栄』前掲I注(63)10頁。

(128) 伊藤うめ・前掲注(127)10頁。

あったようだが<sup>(129)</sup>、2人の姉夫婦と同様、妹・うめ夫婦との関係もまた、晩年まで良好だったようである。ちなみに、栄の愛犬アベベは、妹・うめの飼い犬エルザの産んだ仔である。

#### オ 四女・千枝（千枝子）

【100】 栄より13歳年下の末の妹・千枝（千枝子）に関しては、兄・栄が大学時代に彼女に送った愛情溢れる絵葉書が、我妻家の仏壇から見つかっている<sup>(130)</sup>。

すでに触れたように、彼女は小学5年生になる大正10年、米沢中学を退校した父・又次郎、母・つるとともに、同年東大助手の職を得た栄と、四谷区筆筒町の借家で暮らし始める。転校先の小学校（校名不詳。四谷第三尋常小学校か）で同級になった笠原てい子（俳人）<sup>(131)</sup>によれば、大正11年千枝は小学校を1番で卒業して、東京女子高等師範学校附属高等女学校（現・お茶の水女子大学附属高等学校）に入学。

その後、大正15年3月同女学校の卒業祝いに、同月7日に結婚したばかりの兄・栄の妻・緑から、大きな植物採集用の胴乱をプレゼントされるが、その胴乱を携えて卒業後の春休みに出かけた植物採集で大雨に遭って肋膜炎を患い、以後、4月より進学が決まっていた東京女子大学には1日も登校できぬまま病臥に付し、結核が腸に及んで、昭和5年には危篤状態に陥る。

先にも触れたように、昭和5年は、当時33歳の我妻栄にとって人生最悪の年で、1月に父・又次郎は脳溢血に倒れ、二男・堯を出産した妻・緑は乳腺炎のため手術入院、自身も秋にくじいた左足首の関節炎が悪化して以後ギブス生活を余儀なくされ、母・つるは看病疲れのため11月11日に57歳で死去。そして、母の逝去から10日

(129) 我妻栄「日本人の法感覚」『民法研究Ⅺ補巻2』（有斐閣、平成13年）14頁「……妹の亭主のために連帯保証人になった事があります。ところが彼が失敗したので、相手が銀行ですから私に請求して来ました。私は講義する身でありながらこれを払えないでは困る。そこで支店長に会って『自分はハンを押したから責任を負うことは覚悟している。しかし私の月給はこれしかない。だから一月にこれ以上は払えない、私の払えるだけのものはみんな払うから、それでかんべんしてもらえないのか』と話しますと、支店長も非常に同情して、『あなたのようなことを言ってきた保証人はいまだかつてない、よろしい、私のほうもできるだけのことをします』といって連帯を免除してくれ、私に月掛貯金をやらせ、毎月それを掛ければ、何年かの後には責任を一さい免除する契約をつくってくれ、私はそれで助かりました。』

(130) 我妻堯・前掲注（38）273-274頁……〔再録〕前掲注（38）154-155頁、我妻堯「4枚の絵はがき（兄妹愛）」我妻栄記念館だより9号（平成18年）1頁。

(131) 笠原てい子「玉子酒」夏草45巻40号（昭和49年）……〔転載〕『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）78頁以下……〔所収〕笠原てい子「三鈴の松——随筆」（東京美術、昭和57年）109頁。

後の11月21日には、末妹・千枝も腸結核のため死去する。21歳の短い生涯であった。

二男・堯によれば、「父は生前家庭で何かにつけて米沢の家庭生活や自分の両親、姉や妹（4歳下のうめ）のことを話してくれたのに、この叔母についてはひと言も話したことがなかった」。「私の幼い頃に母は時に『千枝ちゃんはとても頭が良かったのよ』と話してくれたが父は沈黙していた。あまりにも悲しい思い出の為に自分の心に鍵をかけて語ろうとしなかったのであろう<sup>(132)</sup>」。

【追記】 前記【63】で引用した我妻の文章に登場する「ウバ貝」と「ジギリ」について。

筆者（七戸）は、ウバ貝（姥貝）とホッキ貝（北寄貝）は同じもの（ウバ貝の北海道方言がホッキ貝）と認識していたが、我妻は「ウバ貝」を「ホッキ貝」とは別種の貝と考えているようである。一方、「ジギリ」は、新潟県糸魚川以北から山形県までの日本海沿岸地方の「年取り魚」であるサケ（鮭）を指す言葉であるが、しかし、山形県でも内陸部である米沢盆地の年取り魚はコイ（鯉）であるように思われる。ともあれ、ウバ貝もジギリも日本海の家産物で、我妻が米沢の「ふるさとの味」として挙げていることには、違和感を覚える。

そこで、この件に関しても、米沢の我妻栄記念館・矢尾板操館長にお尋ねしてみたところ、矢尾板館長も、記念館管理人の手塚正氏も、「ウバ貝」「ジギリ」のいずれとも馴染みがない、とのお返事であった。

2年後の令和5年（2023年）は、我妻栄没後50周年に当たる。今日の米沢の「ふるさとの味」は、100年以上前である我妻の幼少期から大きく変わっているのだろう。

なお、矢尾板館長からのご連絡によれば、我妻栄の伝記の出版計画が<sup>(133)</sup>、ついに具体的な段階まで進んだという。書籍の発刊を鶴首して待ちたい。

(132) 我妻堯「4枚の絵はがき（兄妹愛）」前掲注（130）1頁。

(133) その端緒については、矢尾板操「我妻栄先生墓参記」我妻栄記念館だより23号（平成30年）3頁参照。